論文

『年報人類学研究』第16号（2025）
Annual Papers of the Anthropological Institute Vol. 16 (2025)

ワリ遺跡複合の聖域におけるD字形神殿

ホセ・オチャトマ・パラビシノ*1　マルタ・カブレラ・ロメロ*1
ホセ・アントニオ・オチャトマ*2
吉川主浩*3（訳）

ここ10年の間に、ワリ遺跡複合（complejo arqueológico de Wari）の聖域（área sagrada）で調査が実施された。発掘調査において、新たに5つの神殿とそれに関連する一連の証拠が発見され、これらの神殿が神々や祖先の崇拝の場であるだけでなく、時間を管理するための天文学的活動の場でもあったことが示唆された。祭祀建築には共通の建設パターンがあるが、その規模、共伴遺物、出土コンテクストは異なる。このことは、神殿間に一定の階層構造があり、神殿が共同集団あるいは専門家集団に属していたことを物語っている。彼らは生活サイクルの様々な段階の始まりと終わりの目印として、火を使用する儀礼的祭祀を行った。

本論文では、神殿の建築的特徴、独自性、様々な種類のコンテクストの共伴遺物を説明する。例を挙げると、建物の建設に使用された道具や、チョンタ製の槍、鹿の角、外来の土器などである。これらの遺物は、神殿が、都市に居住し各々の祭祀場を有していた多様な専門家集団、あるいは商人集団[1]と関係していることを示している。

キーワード

神殿（templo）、祭祀建築（arquitectura ceremonial）、聖域（área sagrada）、儀礼（rituales）

目次

Ⅰ　はじめに
　1　ワリの祭祀建築とその原型
　2　D字形建築の設計の内部構造
　3　ワリ遺跡の聖域
　4　都市ワリのD字形神殿
Ⅱ　ベガチャユフ・モホ地区の神殿
　1　チョンタ製の槍が出土したD字形神殿
　2　D字形の空間――彩色壁画と階段を伴う小型の神託所
Ⅲ　カピリャパタ地区
　1　錘重が出土したD字形建築
　2　カハマルカ様式土器が出土したD字形の祭祀空間
　3　鹿の角が出土したD字形の祭祀空間
Ⅳ　オコパ地区
Ⅴ　モンハチャユフ地区のD字形神殿
Ⅵ　結果と議論

*1 サン・クリストバル・デ・ワマンガ国立大学
*2 ペルー・カトリカ大学
*3 南山大学大学院

1　comerciantes の訳であるが、古代アンデスでは貨幣経済が発達しなかったため、一般的には商人という言葉は使用しないことに留意したい。

Ⅰ　はじめに

学史上、ワリ帝国の首都のワリ遺跡をはじめ、中期ホライズン[2]の神殿に関する先行研究は多くない。1982年にベガチャユフ・モホ（Vegachayuq Moqo）地区で「ワリの大神殿（Templo Mayor de Wari）」としても知られるD字形の神殿が初めて発掘された。それから今日に至るまで、都市ワリの聖域や、ワリが統治・支配することになったアンデスの広大な領域にある行政センター、あるいはアヤクーチョ地域のワリ期の遺跡でも、他の神殿が徐々に発見された（図１）。

ベガチャユフ・モホ地区は宗教建築の最たる例の１つであるが、部分的に発掘されただけで深く掘り下げられていなかったため、出土コンテクスト、活動面、共伴遺物に関する詳細な情報はなかった。その結果、この建物が神殿として機能していたとする考えと、内部に独自の祭祀場を備えた宮殿であったとする考えの、２つの仮説があった（González Carré & Bragayrac 1986; Isbell 2001）。

1994年に筆者らは、現在のアヤクーチョ市南部に位置するニャウィンプキオ（Ñawimpuquio）遺跡と、コンチョパタ（Conchopata）遺跡の発掘調査に参加する機会を得た。形成期、ワルパ期から長期的に利用されたニャウィンプキオ遺跡では、ほとんど知られていなかったD字形建築の存在が確認された（Machaca 1997）。D字形建築を取り囲む部屋内では、大量の陸棲の貝殻ビーズと、少量の海棲の貝殻ビーズを伴うコンテクストがいくつも検出された。これらの空間は、専門職人が陸棲や海棲の貝殻から祭祀具を生産した工房であった。D字形建築の壁は非常に低く、床面とほぼ同じ高さであり、壁龕の形跡はなかった。一方で、床面には灰が集中する焼け跡があり、中央部付近には長靴形の墓があり、ワマンガ（Huamanga）様式の浅鉢（escudilla）が副葬されていた。ニャウィンプキオ遺跡のD字形建築は、アヤクーチョ地域における２例目の祭祀建築であり、そのコンテクストと活動面は明らかに、首飾りや腕輪用の円形ビーズを生産する専門職人と関係していた。

十数年後には、アヤクーチョ市の現在の空港周辺に位置するワリの二次センター[3]である、コンチョパタ遺跡で更なる発見があった。1997～1998年に筆者らが実施した発掘調査は、この遺跡が土器生産の専門職人の集落であったことを確認するだけでなく、住民の社会・経済・イデオロギーの様々な組織形態についての知見を広げることにもなった（Ochatoma & Cabrera 2000）。このとき初めてD字形建築の内部で、建築放棄の儀礼に関連する夥しい量のコンテクストが記録された。建築内の壁沿いに小さな土坑が複数あり、その中に頸部に人面装飾を伴う尖底壺（人面頸部壺）の破片が集積していたのである。これらの土器片には、動物の属性を持つ超自然的存在の他、戦士、平民、支配者と思われる人物像など、目新しい図像が表現されていた。

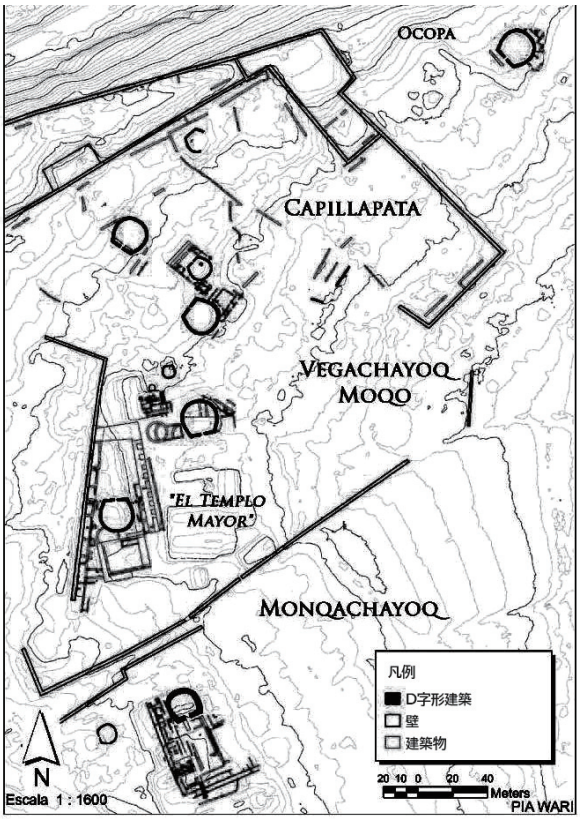

図１　ワリ遺跡複合のモンハチャユフ地区、ベガチャユフ・モホ地区、カピリャパタ地区、オコパ地区におけるD字形建築の位置図

この新発見により、神聖な場を放棄する過程の一環として行われた儀礼や祭祀のコンテクストが、無傷の状態で明らかになった。その証拠に、割られた土器だけでなく、切り落とされた人間の頭部、生贄にされたラクダ科動物などがあった。さらに床面上には、浅鉢

2　アメリカ人研究者がよく使う編年において紀元後600～1000年頃の時期を指す用語であり、日本人とペルー人がよく使う編年ではワリ期と呼ばれる。

3　首都を一次センターと呼ぶと、首都に次ぐ規模の大遺跡は二次センターと呼ばれる。

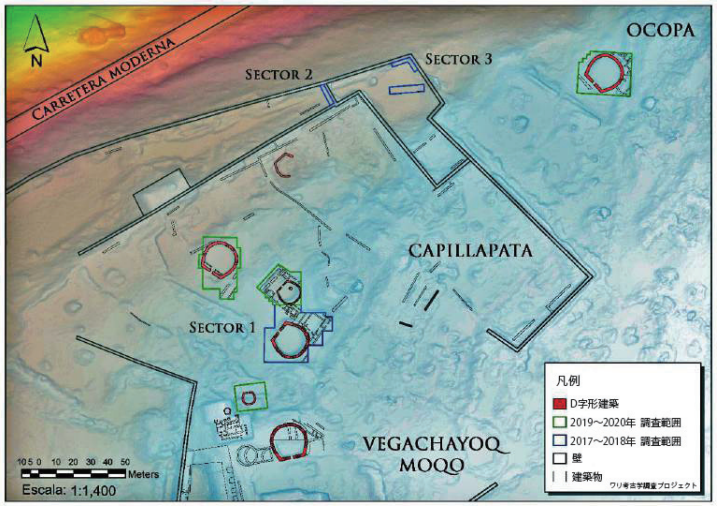

図２　ワリ遺跡複合の聖域におけるＤ字形建築の位置図

や球形鉢（cuenco）などの日用土器があり、筆者らが日時計と同定した、環状の石に囲まれた石製の円柱もあった。建築の大部分は厚い灰層に覆われていたが、おそらくこれは集中的に焼かれた結果であり、集落の歴史の転換点を示している。なぜなら、焼却は日常性に反する出来事であり、Ｄ字形の祭祀空間の権威が失墜し、関係していた集団から他の集団に権力が引き継がれたことを示すものだったからである。

これまでの経験を踏まえ、Ｄ字形の神殿とそれに隣接する部屋群の機能を理解するため、筆者らは首都ワリの中でも特に聖域と呼ばれる区域を中心として、発掘調査を実施することにした。こうして2012年から2019年までにベガチャユフ・モホ地区、モンハチャユフ（Monqachayuq）地区、カピリャパタ（Capillapata）地区、オコパ（Ocopa）地区が調査され、様々な規模やコンテクストのＤ字形神殿が新たに５つ発見され（図２）、これらの神聖な空間の機能が多岐にわたることが判明した。おそらくＤ字形神殿は、専門商人の共同集団や、都市内の権力集団に割り当てられたのであり、彼らは神々や祖先を奉り儀礼・祭祀を行っていたのだろう。

建築的特徴に従えば、最も重要かつ最高位の神殿は、ベガチャユフ・モホ地区の神殿だったのだろう。２つの基壇とそれに接する部屋群、大広場、アクセスを制限する城壁のような壁があるのは、ベガチャユフ・モホ地区だけである。発見された全ての考古学的証拠から、神殿では神々や祖先の崇拝だけでなく、時間を管理するための天文学的活動も行われていたと考えられる。Ｄ字形神殿の内壁に設けられた壁龕には屋根があったが、中にはマルキ（mallqui）、すなわち祖先のミイラが安置され崇拝されていたのかもしれない。

この習慣は、死んだ祖先を尊敬・崇拝し、祖先を親族や共同体の神々、あるいは守護者として見なすことを意味していた（Gil García 2002）。これは過去と現在の世代間の繋がりを深めただけでなく、アイデンティティや共同体への帰属意識も強化した。古代ペルーではこのような祖先崇拝の習慣が深く根付いており、支配者を正当化するための基盤となっていた（Kaulicke 1997, 2001）。この崇拝の最も有名な特徴は、エリートの祖先崇拝と結びついているが、実際には集合的な儀礼の他に、社会のあらゆる集団が何らかの形で自分たちの祖先を崇拝する習慣を持っていた。それにより、共通の起源を中心として社会の構成員が団結できるような一種の社会的記憶が形成されていた。

ワリの場合、神々や祖先の崇拝は、祭祀場または神殿、そして陵墓と密接に関係している。それを物質的に表現しているのが、Ｄ字のように一端が直線になった円形の、内部に壁龕を伴う建築物である。この建築物に隣接する広場や部屋群には、時に人身供儀を伴う祭祀が行われた形跡がある。頻繁に何かが燃やされ、土坑内には儀礼的な埋納がなされた。それは神々を鎮め交信するため、あるいは共同体の生活サイクルを終わらせるためのものであった。

本論文では、ここ10年間にワリ帝国の首都の聖域で発見されたそれぞれのＤ字形建築に関する経験的な[4]情報を提示する。共通する要素と独特の要素が認められており、それに基づいてＤ字形建築の多機能性に関する仮説を提唱する。

１　ワリの祭祀建築とその原型

ワリ遺跡の祭祀建築や神殿について語ることは、疑いなく、既に知られているＤ字形建築について話すということである。アルファベット大文字のＤに似ていることから通称でこのように呼ばれるが、厳密には、円形部分と直線部分から成る半円形の建築物である。これまで「半円形建築（estructura semicircular）」

4　empírica の訳であり、実際の調査を通して得られた情報や証拠であることを示している。

(Benavides 1991; Pozzi-Escot 1991)、「切り取られた円形建築（estructura circular truncada）」（Solano & Guerrero 1981）、「D字建築（estructura en D）」または「D字形建築（estructura con forma de D）」（Bragayrac 1991; Cook 2015; Isbell 2001; Isbell & Cook 2002; Ochatoma 2007; Ochatoma & Cabrera 2001, 2002, 2010）などと呼ばれてきた。

ある地域をワリが統治していたかを突き止めるための要素の1つが建築であり、最も代表的な2つの建物、すなわち直線壁が碁盤目状に直交する構造の建物（Isbell 1983; Schreiber & Edwards 2010; Williams León 1981）とD字形建築が存在するかどうかだった。そのうち後者は、ワリの儀礼の中核となる部分である（Ochatoma & Cabrera 2002, 2010）。しかし、その機能に関する研究や仮説は、アヤクーチョ地域とそれ以外のごく一部の地域における数事例のみに基づいて提唱されたものだった。

今日までD字形建築の直接的な原型は報告されていない。図像学の領域（Cook 2001b; Isbell & Cook 1987）ではアルティプラーノ[5]との関係が示されているが、この地域ではD字形建築に似た建築が報告されておらず、最も近しい祭祀建築の事例は、アヤクーチョ谷にある前期中間期（ワルパ期）の小さな円形建築である（Leoni 2000）。また、アヤクーチョ谷の南に位置するルカナス谷では、マルクス・ラインデルとジョニー・イスラ（Reindel & Isla 2017）がパラカス中期（紀元前550～350年）に遡る建築パターンとして、半地下式広場の周囲にD字形の部屋群が並ぶ「花形のパラカスの遺跡（Sitios Paracas con forma de flor）」というパターンを報告した。

アニータ・クック（Cook 2015）はフアン・レオニ（Leoni 2005a）と同様に、D字形建築の原型が前期中間期の円形建築に遡ると考えている。彼らは、円形建築が山岳部の共同体（ワルパ）だけでなく、海岸部の共同体（ナスカ）にもあったことを踏まえている。しかし、ラインデルとイスラ（Reindel & Isla 2017）の報告を合わせて考えると、さらに古い形成期に遡る伝統があったのだろう。

2　D字形建築の設計の内部構造

D字形の祭祀建築は、ワリの中心となる建造物の一パターンである。建築レイアウトは、円形の一端を直線で切り取ってそこに出入口を設けた建物であり、その名の通りアルファベット大文字のDのような形をしている。この建物は地方にあるピキリャクタ（Pikillacta）遺跡、ビラコチャ・パンパ（Viracocha pampa）遺跡、アサンガロ（Azángaro）遺跡、ヒンカモッコ（Jincamocco）遺跡など、直線壁が直交する構造の建物とは異なり、予め定められた方位を持たない。その代わり、山、山頂、湖といった神聖な地点、あるいは二至二分といった季節の変わり目に関係する基本方位を組み合わせていたようである。

地方の遺跡やコンチョパタ遺跡のような二次センター、さらには首都のワリ遺跡でも、大多数のD字形建築の直径は約10mであった（Cook 2001a）。しかし、首都ワリにおける筆者らの調査では、直径が22m、壁の厚さが1.70mにもなる最大のD字形建築が確認された。さらに、直径3.2mの小規模なD字形建築も2つ発見された（Ochatoma et al. 2015）。したがって、その大きさに応じて大型、中型、小型の3つに分類できることが分かってきた。

首都のワリ遺跡の場合、D字形建築はいずれも、壁の内側に設けられた壁龕、直線部分の中央の出入口、そして半円形の構造物の中心に直立する円柱を主な構成要素としている。この建築の具体的な機能はまだ完全には明らかになっていないが、神々や祖先の崇拝および天文学に関係する儀礼的活動の実践と結び付いていたことは疑いなく、そのための最も重要な要素として火が使われていた。

大多数のD字形建築に存在すると思われるもう1つの要素は、円形またはD字形の小さな構造物と、おそらくその中心に立てられていたであろう石製の円柱である。このような構造物は、日時計の「インティハワナ（Intiqawana）」として同定されている（Ochatoma 2007; Ochatoma et al. 2015）。また、ワリ遺跡で発掘された全てのD字形建築で、床面に多数の穴や土坑が見つかっており、建物の放棄に伴って大量に焼かれた遺物が集中している地点も検出されている。

細かいことだが、D字形建築の内部にある壁龕の配列と配置も見逃すべきではない。壁龕は2、4、5という個数をそれぞれ1組として、側柱で分けられ配置されている（図3）。D字形建築のうち1つが良い保

5　ペルー、ボリビアのティティカカ湖周辺の高原地帯をこのように呼ぶ。

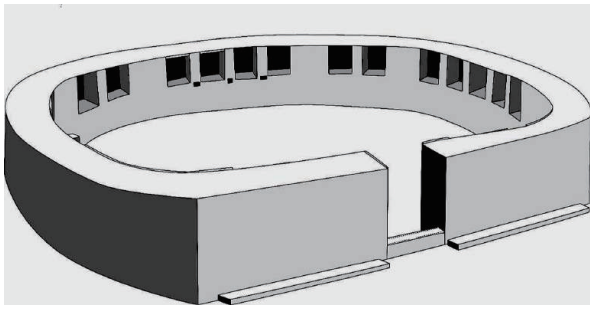

図３　Ｄ字形建築の３次元復元図

存状態にあったおかげで、全ての壁龕に屋根が付いていたことを突き止めることができた。

最後に、これらの建築の建設順序は、基礎、下部の壁、上部の壁（壁龕）、仕上げという確立したパターンに従っていた。第 1 段階では、溝を掘った中に大きな石材で造られた両面壁の基礎が置かれる。第 2 段階では、基礎の上に、裏込めを伴う両面壁が築かれる。第 3 段階では、下部の壁の上に、壁龕を造る薄い壁や、壁龕の組を区切る側柱が築かれる。そして最終段階では、何層も白い漆喰が塗られて仕上げがなされる。

３　ワリ遺跡の聖域

都市ワリの中核部は推定600 ha の広大な範囲に及び、巨大な壁や大規模な建築複合が建設された。建築遺構の特徴から、宗教的な崇拝のための地区、支配者や政治権力の行使に携わる役人のための宮殿、切り石造りの陵墓がある墓域、倉庫、居住区域、工芸品の生産区域などがあったことが知られており（Gonzáles Carré 1992; Lumbreras 1974, 1980, 2010）、都市ワリが果たしていた機能の多様性を示している。これは建設計画、国家による効率的な事業の組織化、そして首都ワリや征服地域で再現するための先行モデルがなければ実現不可能であった（Ochatoma & Cabrera 2010: 132）。

首都ワリで行われた幾度もの考古学的な踏査の結果は、都市にいくつもの地区があったことを示している。それぞれの地区ではおそらく生産、消費、交換、管理が行われ、そのことが様々な特徴を持つ建物に表されている（Cabrera 2005: 28）。

管理に関わる地区には、国家や社会の支配者集団を表象する記念碑的建造物がある。その地区自体が、社会全体のイデオロギー的再生産のための公共建造物や建築複合から構成されている（Cabrera 2005: 28）。

古代都市ワリでは、都市の公共祭祀区域を構成する記念碑的な建築複合は「聖域」と呼ばれてきた。首都ワリの北西部に位置し、印象的な建築が最も集中する区域の 1 つである。当時マウンドや非常に派手な建物があった区域であり、パカイカサ（Pacaycasa）谷に面した台地の縁に建つ高い壁に囲まれている。チュパパタ（Chupapata）と呼ばれる地区のワイリャパンパ（Huayllapampa）谷に隣接する岩山までが範囲となる。

聖域に含まれる地区は、カピリャパタ地区、ベガチャユフ・モホ地区、オコパ地区、モンハチャユフ地区である。ここでは祭祀や埋葬に関わる一連の建物が確認されており、D字のように円形の一端が直線になった建築、陵墓、多種多様なタイプの墓が目立つ。その中でも特に、神々や祖先を崇拝する宗教的活動に関係する石室墓や円筒墓（cista）、土坑墓が際立っている。

したがって、聖域とは非常に重要で霊的な（espiritual）価値を持つ神殿や墓があった空間であり、そこで首都ワリの住民は、神々や祖先と交信を持ち続けたのだろう。そのため、聖域は儀礼や祭祀、宗教的・霊的な活動が行われた場所であり、崇拝と尊敬に関わる空間でもあった。

ここ10年間の発掘調査で 5 つのD字形の祭祀建築が発見されたことで、こうした地区を都市の「聖域」として見なす仮説が補強された。この場所に、宗教的な祭祀に関わる役割を果たした建物が最も集中しているためである。それだけでなく、記念碑的な建築物を伴う 2 つの王墓と思われる墓や、埋葬用の地下回廊も発見されている。地下回廊は葬送儀礼の空間に関連しており、神や超越的なものとの直接的あるいは霊的な繋がりが確立される特別な場所となっていた。埋納された一連の奉納品や、神殿の内側と外側の両方に見られる焼け跡などは、祖先や神々との繋がりを確立するための祭祀や儀礼が行われたことを示している。

４　都市ワリのD字形神殿

1980年代にベガチャユフ・モホ地区で初めてD字形建築が発掘されて以来、今日に至るまで多くのワリの遺跡と首都の両方で、いくつもの神殿または祭祀場が発掘されてきた。それによって、D字形建築の機能や建築的特徴に関する知識が深まった。以下では、新たに得られた情報について説明し、ワリ遺跡の聖域について既に知られている情報を補完し充実させる。

II　ベガチャユフ・モホ地区の神殿

ベガチャユフ・モホ地区はワリ遺跡で最も重要な祭

祀地区であり、1982年にエンリケ・ブラガイラックとエンリケ・ゴンサーレス・カレによって発掘された。この地区で初めて、宗教建築と思われる公共建築の好例が発掘され、それから神々や祖先に対する儀礼に関係する空間の特徴がより詳細に理解されていった（González Carré & Bragayrac 1996: 15–16）。

その建築複合はピラミッド状マウンドの頂上に位置し、城壁のような壁に囲まれた1万 m^2 の面積を占めている（図4）。神殿の正面には、上段から順に大きな基壇が2つある。第2基壇には、側面の壁に壁龕を有し、壁面に白い上塗りが施された祭壇（altar）がいくつもある。第2基壇の壁には、中央部分への出入口を持つ部屋群が接しており、中央部分には、円形の北側部分が直線壁になっていて出入口を伴う建築がある。この建築の内部には18の壁龕があり、建築の直径は平均20m、壁の厚さは1.60〜1.80mである。

先に示した部屋群の壁には、赤い上塗りの上から白い上塗りが重ねられている。部屋内には壁龕や半円形の窪みもあり、窪みの中には継続的に火が焚かれていたことを示す炭化物や灰が残っていた。この部屋群から見て広場の向かいにあり、地区内でも標高の高い地点に位置する高い壁には、壁面に赤い上塗りが施された泥・石製の建物が接している。これは、高い壁に掘り込まれた壁龕ないし墓の前方に位置する小さな部屋群である。壁龕は台形であり、木製のまぐさが渡され、上塗りが施されている。壁龕の中には3〜4体分の人骨が安置され、葦の束、織物の残骸、奉納された土器に覆われていた。これらの人物の頭蓋骨が長く変形していたことは、彼らが宗教的な崇拝や神殿での活動に関係する社会的役割を果たしていたことを示しているのだろう。

ベガチャユフ・モホ地区の後方[6]は開けた空間に続いており、そこにこの建築複合を取り囲む高い壁が建っている。この壁には出入口が2つあり、その中間には、壁が赤白に塗られた祠（adoratorio）が存在する。祠があったのは壁の外側であり、壁に挟まれた通路がそこに向かっている。

建物の機能に関して、ゴンサーレス・カレとブラガイラック（González Carré & Bragayrac 1996）は、この地区が、神々や祖先と交信するための神聖な空間を象徴する祭祀区域[7]の1つであると指摘している。なお、祭祀区域や神殿であったという仮説は、後の時代の石室や建築物の中から、チャンカ文化の土器を伴う集合墓が見つかったことからも裏付けられている（González Carré & Bragayrac 1996: 25; Tiesler 1996: 112）。このような手がかりは、古代都市の栄華の記憶や、神々の重要性から、古い信仰をしばらく止めていた人々が新たにこの遺跡を巡礼したことを示しているのかもしれない。

ベガチャユフ・モホ地区は全て発掘されたわけではなかったため、2018年に筆者らが発掘調査を実施した（図5）。そこでD字形の祭祀建築を完掘し、隣接する部屋群の床下から一連の奉納品を発見した。D字

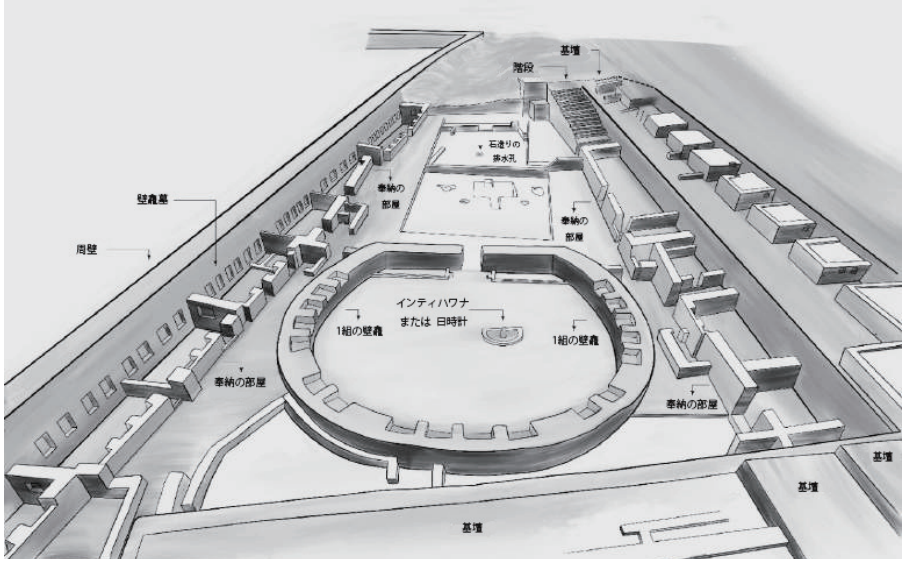

図4　ベガチャユフ・モホ地区のD字形建築「大神殿」と関連する複数の基壇、部屋、広場の3次元復元図

6　parte posterior の訳であり、筆者はD字形建築の直線部分を前、円形部分を後ろとする視点からこのように呼んでいる。

7　área ceremonial の訳であり、ゴンサーレス・カレとブラガイラック（González Carré & Bragayrac 1996）は、当時に本格的な発掘調査が行われていたベガチャユフ・モホ地区、モンハチャユフ地区、モラドゥチャユフ（Moraduchayuq）地区、チェホ・ワシ（Cheqo Wasi）地区の4つを合わせてこのように呼んだ。これは「聖域」の前身となった説とも言えるが、「聖域」は本論文で詳細に説明される4地区とチュパパタ地区までを範囲とするため、両者は一致しない。むしろ「聖域」の範囲は、ルイス・ルンブレラス（Lumbreras 2010: Lam.34）による聖域（Zona Sagrada）の範囲に従っている。

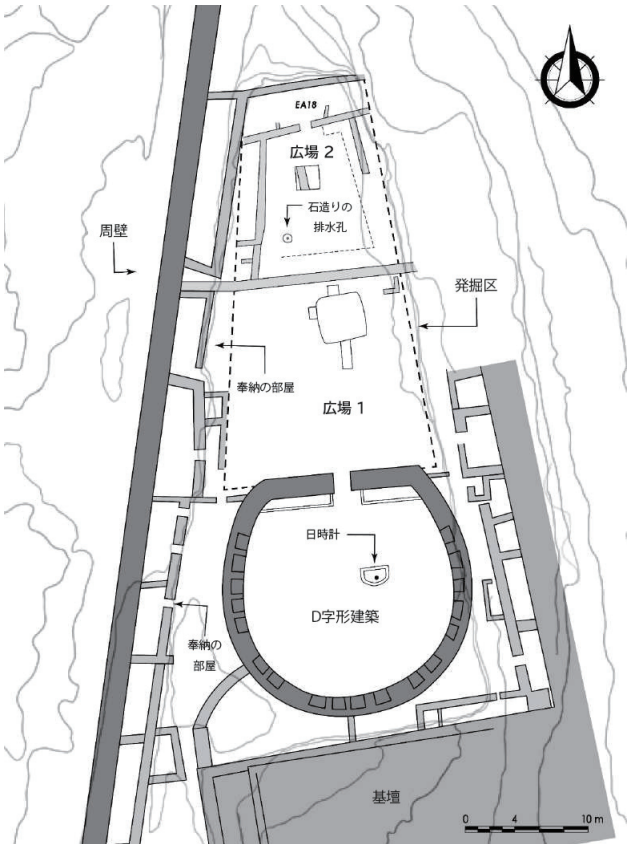

図５　ベガチャユフ・モホ地区の神殿、奉納の部屋、広場の平面図

図６　ベガチャユフ・モホ地区のＤ字形の祭祀建築の床下にあった初期の部屋

形建築は、古い建築を完全に埋め、その上にポゾラン製の固い床を張って建てられていたことが分かった（図６）。この床面上には、日時計として同定された、環状の石に囲まれた石製の円柱遺構があった。床面の大部分は損傷しており、所々に焼け跡が見られた。また、Ｄ字形建築の壁の直線部分に平行する薄い壁が２本検出され、出入口の両側に長さ4m の細長い部屋が２つあった。儀礼で使用するためのチチャなどの飲み物が入った壺を保管しておく場所だったのだろう。

床下で見つかった建築は意図的に埋められており、埋め土[8]の中からは６つの長方形の部屋と、もう１つの完掘されていない建築空間に対応するであろう直線壁が見つかった。最大の部屋は、長さ6.70m、幅5.24m の長方形の平面プランを有する。壁には泥漆喰が塗られ、乳白色の塗装の痕跡が残っていた。泥製の固い床が張られ、その中央部には灰が堆積しており、埋め立て前に何かが儀礼的に焼却されたことを示している。

床下の部屋群から出土した遺物のうち、大部分を占めるのは土器片である。型式学的な分析から、60％が前期中間期に属するタイプ、つまりワルパ文化の文化的表現を伴う土器であることが判明し、ワルパ・ベージュ地彩文（Huarpa ante）、ワルパ白地黒彩（Huarpa negro sobre blanco）、ワルパ・ベージュ地黒彩（Huarpa negro sobre ante）、ワルパ三色彩文（Huarpa tricolor）などのタイプが同定されている（図７）。次いでカハ（Caja）様式が３％、オクロス（Okros）様式が15％、クムンセンハ（Kumunsenqa）様式が12％、チャキパンパ初期（Chakipampa temprano）様式またはクルス・パタ（Cruz Pata）様式が５％となっている。また埋め土からは、かなりの量のラクダ科動物の骨がバラバラの状態で見つかった他、玄武岩の剥片（lascas）や縦長剥片（láminas）、石核、端部が割られた叩き石（percutores）、ボーラ、玄武岩の尖頭器、黒曜岩の製作残滓も出土した。

床面は、粉砕されて粒状になったポゾランが平均４～6cm の厚さで使用されたため、堅固な造りになっている。床面は、南側にわずかに傾けながら予め踏み固められた面上に張られており、傾斜の先には集水孔が２つあった。これは雨水を集めて約1m の深さにある地下水路に導くためのものであった。地下水路は岩盤を掘って造られ、平石の蓋で覆われていた。この水路は、祭祀建築の外部西側のより大きな水路と繋がっている。

Ｄ字形建築の中央部付近では、柱を伴う構造物の一部が検出された（図８、９）。柱はＤ字形の構造物に囲まれた小さな空間の中央に立てられていた。また、少なくとも１度、床面が張り替えられたことが層位的に確認された。

8　relleno の訳である。

図７　Ｄ字形神殿の床下で発見されたワルパ期のワルパ白地黒彩タイプ、オクロス様式、チャキパンパ初期様式、クルス・パタ様式の土器片

床面上では、1982年に完掘されなかった、床を覆う埋め土の一部が取り除かれた。出土遺物は、ワルパの土器タイプが26％、次いでチャキパンパ様式が30％、ワマンガ様式が30％あり、ビニャケ（Viñaque）様式とワリ黒色（Wari negro）様式は４％と少なく、残りは無文の日用土器の破片で構成されていた。

Ｄ字形建築の出入口に面している北側には、長さが34m、最大幅が17.20m、最小幅が9.20m となる大きな台形広場がある。当初は地面が平坦であることから単一の空間として考えられていたが、発掘したところ、空間の中央部付近から広場を二分する仕切り壁が発見され、壁には出入口が３つ備わっていた。

Ｄ字形建築の出入口に面する広場は、長さ19m、幅17～19m の四角形の形をしている。直線壁の外側にはベンチ状の構造物があり、ポゾラン・珪藻土製の固い床面と繋がっている。床には、岩盤まで届く穴がいくつも掘られている。最も重要な発見は、仕切り壁のすぐ近くかつ空間のほぼ中央部に位置する、岩盤に掘り込まれた隅丸方形の土坑である（図10）。この土坑の寸法は長さ4.5m、幅3.90m であり、床下の埋め土で覆われていた。その下には踏み固められた層があり、これが炭化した種子や大量の焼けた織物を含む灰色の厚い層を覆っていた。層の厚さから判断すると、おそらく隅丸方形の土坑は、何らかの祭祀の一環として織物を大量に焼くために使用されたのだろう。深さは2.50m 以上あり、土坑の底部付近では切り石が四方の壁に接して見つかった。

壁で囲まれた２つ目の広場には、水路に繋がる集水孔が存在する（図11）。中央に穴が開いた大きな切り石があり、その周囲を床面のように平石が取り囲んでいた。そのすぐ近くでは、土器片やラクダ科動物の骨、灰が集中する地点が見つかった。広場の北端では、広場を取り囲む大きな壁に接する長方形の部屋が複数検出された。

Ｄ字形建築は単独で存在するのではなく、建物に囲まれており、東側には基壇、西側には高い壁に接した部屋群がある。北側は広場に面し、南側は未発掘の複数の基壇に隣接している。筆者らはコンチョパタ遺跡やワリ遺跡の祭祀建築の発掘調査から得られた情報を基に、Ｄ字形建築に隣接する部屋群に調査範囲を拡大した。ここでは広範囲の発掘調査は行われておらず、部屋の床面や壁龕の一部が検出されただけであった。

ここで得られた調査結果は非常に重要であり、祭祀建築に隣接する長方形の部屋の内部で、一連の儀礼的な埋納が発見された。この埋納は、床面を掘り込んだ土坑の中に一連の遺物を入れた後、それを保護するた

図８　床面と日時計を復元した祭祀建築の俯瞰写真

図９　ベガチャユフ・モホ地区のＤ字形神殿内にある日時計のインティハワナ

図10　方形土坑。穴の底部には切り石や、神殿広場での儀礼の一環として激しく焼かれた織物の痕跡があった

図11　Ｄ字形神殿に隣接する広場にある雨水用の集水孔

めに埋めるという儀礼的行為が行われた証拠である。遺跡が放棄されていた期間、大規模な破壊と盗掘に見舞われたにも関わらず、「パガプ（“pagapu”）」とアンデスで呼ばれる様々な奉納品が出土した。多種多様な遺物が、基壇やこの地区を取り囲む壁に接した部屋内の土坑に埋められていた。

こうした証拠に基づくと、奉納品は様々な場面で埋められたことが分かる。おそらく新しい空間の建設や改築､再建設のタイミングで埋められたものもあれば、葬送儀礼の一環として埋められたものや、神々への奉納品、あるいは放棄の一環として埋められたものもあったと思われる。

奉納品は１種類だけでなく何種類もあった。様々な目的を持つ何種類もの遺物が、個別あるいは対になって奉納された。聖域に奉納されることで、非常に特別な象徴的意味が付与された。そのため、今日に至るまで、ベガチャユフ・モホ地区はワリ遺跡複合における最も重要な場所の１つとなっている。

このことは疑いなく、都市ワリの最盛期や、公共祭祀、都市を支配していた集団の覇権の誇示に関係している。ワリの国家行政をより複雑にした政治的・社会的状況の中で、儀礼的な埋納は非常に重要な役割を果たした。埋納は様々な出来事や事象に関連して、一連の遺物を伴う儀礼が行われた証拠を残した。

経験的証拠によれば、中期ホライズンに一般的かつ頻繁に行われていた習慣の１つは、土器を割る、あるいは儀礼的に「殺害」するという習慣である。これには埋葬されたラクダ科動物の全身や体の一部、金属、織物などが伴うこともあったが、おそらく神々への奉納の種類によって異なっていたのだろう。このような儀礼的な埋納は、ベガチャユフ・モホ地区の場合、壁に上塗りと塗装が施され、ポゾラン、珪藻土、粘土で造られた固い床面が張られていた長方形の建築物の中でなされた。ほぼ全ての埋納は、床面を浅くまたは深く掘り込んだ土坑に入れられた。非常に特徴的な例として、土坑の内面に石を張り、１枚の平石で蓋をして、床面の高さまで埋めたものがあった。

発掘調査では､様々な種類の埋納が確認されている。一連の奉納品とともに聖域内に葬られた二次埋葬もある。その他に、意図的に割られた精製土器、多彩色の編み籠、ウミギクガイの貝殻の加工品の破片、人間の形をした石製の彫像、銀製の皿、トゥプ（留めピン）、

図12　ベガチャユフ・モホ地区のD字形神殿に隣接する部屋内に埋納されていた土器、海棲の貝殻、金属、織物など様々な奉納品

図13　土坑の中で意図的に割られた土器の奉納

図14　円筒墓内の切り落とされた頭部、長頸壺、女性用の留めピン。頭部は皿の上に置かれていた

クイの埋葬、ピーナッツの種子、トウモロコシの穂軸などがある（図12、13）。

発見された全ての埋納のうち、人身供儀に関連する儀礼についての手がかりとなる2つの重要な例について注目したい。1つ目の埋納は、祭祀建築の西側に位置する長方形の部屋内にあった。床面の下にあって1枚の平石で蓋をされていたが、それを取り除くと、内面に石が張られた円筒墓が発見された。墓の中には皿が1点あり、その中には切り落とされた頭部が入っていた（図14）。前頭部に穴が開いており、まだ頸椎が2つ繋がっており、女性用の留めピンと、小さな長頸壺（botella）1点を伴っていた。もしかするとこれは、首をはねられ、奉納品として埋められた婦人の生贄だったのだろうか？　2つ目の埋納は、1例目の部屋の隣にある部屋の、床下に掘られた土坑内にあった。ここにはバラバラで不揃いの人骨、頭蓋骨1点、完形土器2点、留めピン9点が入っていた。

とりわけ目を引き、今日までワリ期の土器としては他に類を見ない性質の土器がある。それは上部に人間の顔を持つ気管、下部に2つの肺とその間に心臓が、

見事に写実的に表現された土器である。筆者らはその表現から、ワリの人々は遺体を解体して柔らかい部分を取り出し、儀礼で神々に捧げなければならなかったと考えている。この象形土器が発見されたことで、神話的な神々がくちばしで気管と肺を咥えているように見える、ワリの複雑な図像表現を解明するための多くの手がかりが得られた。この図像は、遺体を解体して柔らかい部分を取り出し、それを神々に食料として象徴的に捧げるという人身供儀を表しているのだろうか？　ワリ期に首をはねて柔らかい部分を取り出し、それを神々に象徴的に捧げる人身供儀が行われていたことは確かで疑いない。

おそらく人身供儀は先スペイン期の多くの社会で一般的な習慣だったが、ワリの場合、ベガチャユフ・モホ地区の最新の調査結果は、目新しい情報である。それについては研究され始めたばかりであるが、アヤクーチョ地域に出現した古代の帝国国家を知る新たな研究の方向性が出てくるであろう。

また、籠、加工途中の織物と織物生産の道具、焼いて装飾を施したヒョウタン、バラバラの人骨などを含む儀礼的な埋納もある。それに加え、ピーナッツの種子、トウモロコシの穀粒が付いた穂軸、クイの埋葬も見つかっている。ウミギクガイ、すなわちムリュが多数の奉納品の埋納から繰り返し発見されたことは重要である。ウミギクガイは、水との強い象徴的な繋がりを持っていた他に、建築物の建設と放棄の過程にも関係していたのだろう。

ここまで見てきたように、D字形の祭祀空間に隣接する様々な建築における儀礼的な埋納のコンテクストは、その内容物や共伴遺物の種類に応じて様々である。神々や祖先を奉って一連の儀礼が行われた神聖な区域内でなされた埋納が、その重要性を示している。

これまでのところ、ワリ遺跡の聖域にある他の祭祀建築で同様の埋納は発見されておらず、数段の基壇も発見されていない。今日までのところ、ベガチャユフ・モホ地区の「大神殿」は都市ワリにおける最も重要な祭祀施設となっている。

1　チョンタ製の槍が出土したD字形神殿

先のD字形神殿から約60m東側の平地上の高所部でも、同様の建築が発掘された。壁の上部や南向きの出入口が見えていたが、数年前には部分的に発掘されただけだった。

発掘調査により、南側が直線壁になった円形の祭祀建築が完掘された。直線壁には出入口があり、隣の広場と3段の階段で繋がっている。建築の外径は南北方向に21.84m、東西方向に21.44mである。内径は南北方向に17.50m、東西方向に18.40mである。

この建築の円形壁の内側には、わずかに大きさの異なる18の壁龕がある。それに対し、直線壁の出入口にはおそらく扉が存在し、側柱の両脇に並ぶ2つの小さな壁龕の中に固定器具が取り付けられていたのだろう。これまで他の同様の建築に見られなかった独自の建築的要素として、円形壁の東西の中央部に位置する、高さ52cm、幅45cm、奥行き52cmの2つの壁龕がある。崩れていたが発掘したところ、白い上塗りの壁龕で、下面が床面と同じ高さにあり、内部には何も入っていないことが分かった。一般的に、壁龕にはまぐさの跡が残らないが、壁龕の側柱や、まぐさや屋根をはめ込む壁龕上部の石[9]には、乳白色に塗られた泥漆喰の痕跡が残っている。

祭祀建築の壁は、特別かつ精巧な石積み[10]（mampostería especial y careada）の技法で築かれた。中程度～大きなサイズの長方形の割石と切り石が、平らな面が内側の壁面を向くように置かれ、壁はほぼ平坦で、きれいに仕上げられた。壁の厚さは1.45～1.70mであり、床面からの高さは平均1.80mである。

壁の最終的な仕上げは、漆喰の上塗りと、その上から重ねられる塗装だった。あらゆる点から、建築内部では、乳白色の塗装によって慎ましさと上品さが生まれていたと考えられる。発掘調査により、漆喰の大部分が意図的に剥がされ、建築全体を覆う埋め土の中に投げ込まれたことが示されている。発見された漆喰は、粘土、藁、厳選された砂、そしておそらく粉砕されたポゾランが混ざった非常に固い塊である。この塊には漆喰として使用されたモルタルが塗られており、内側

9　mochetaの訳であり、筆者はまぐさや屋根が載る面から上に突き出た部分の石を指して、この用語を用いている。

10　マリオ・ベナビデスが個別に説明した、特別な石積み（mampostería especial）と精巧な石積み（mampostería careada）を組み合わせた技法と思われる。特別な石積みは、壁面に小さな細長い板状の割石を使用し、それを泥モルタルで固める技法である（Benavides 1984: 45, 1991: 58を参照）。一方で、精巧な石積みは、中程度の大きさの長方形の石に軽く切り石加工を施して下部に置いた後、その上に泥モルタルで固めた小さな石を規則正しく積み重ねることで、石室墓に見られるような一枚の規格的な形の壁を建てる技法である（Benavides 1984: 45, 1991: 59を参照）。

図15　チョンタ製の槍が密集する地点。D字形建築の床面上で放棄の儀礼の一環として焼かれ、炭化していた

図16　チョンタ製の先端の鋭い槍。焼かれて炭化していた

には中空の茎の痕が残っていた。

床の表面は頑丈かつ平らで、ポゾラン、砂利のような粒状の砂、そして厳選された粘土で造られたため、非常に堅固になっている。本来の色は乳白色だったが、高温で焼却儀礼が繰り返されたことで粘土が酸化したため、建築内の所々に灰色がかった色、緑色がかった色、赤みがかったオレンジ色が見られる。床の厚さは16～23cmとムラがあり、1つ前の時期の建築物を意図的に埋めた後、石畳のような仮設の床を造った上に張られていた。

この祭祀空間が完全に放棄される前に意図的に埋められたことを示す証拠の1つは、大きな割石と四角形・長方形の巨大な切り石が、建築内の空間全体を覆っていたことである。その中から出土した遺物として、ワルパ期とワリ期の土器片、散乱して位置関係が分からないラクダ科動物の骨や人骨、磨研具(pulidor)、砥石（abrasivo)、叩き石といった石器などがあり、特筆すべきは火山凝灰岩製の円錐形の栓(tapón)である。また、内壁から剥がれ落ちた、白く塗られて締まったポゾランとモルタルの小さな塊の瓦礫が大量に出土し、さらにキンチャ[11]と縄の残骸が、灰と炭化物の集中地点から発見された。

空間を埋めていた石の下からは、床面全体がはっきりと現れた。床面には大量の灰や焼け焦げた有機物を含む焼け跡が見つかり、小さな塊状に縛られた藁、木の丸太、様々な太さの縄が集中していた。

面的発掘によって出土コンテクストの全てを記録することができたが、いずれも祭祀空間を完全に放棄する一環として、有機物を集中的に焼却した証拠である。集中的に燃やされた痕跡の多くは、D字形建築内の中央部と南側に位置している。全ての場で、かなりの量のイグサ（juncos)、藁、太い丸太や細い丸太が見つかったが、植物繊維・ラクダ科動物の毛・ワタ製の縄で縛られたものもあった。それらは建築を完全に放棄する前に行われた儀礼の一環として焼き尽くされていた。さらに、高温燃焼によってガラス化したように見える床の上から、先端の尖った槍と思われる炭化したチョンタの束が発見された（図15、16)。

同様の焼却は祭祀建築に隣接する空間でも同時に行われたが、そこにはチョンタ製の槍だけでなく、完全には特定できていない遺物も含まれていた。葦やイグサとともに細い丸太や太い丸太に縛り付けられた藁の塊は、重要な儀礼的行事を想起させる。残り火がまだ燃えている間に、この場所が石材と土で素早く埋められ、完全に放棄されて閉鎖されたことを示している。大量の炭化物や半分焼け焦げた丸太の他、細い縄や中程度の太さの縄が混ざった藁の残骸があり、放棄の過程を明確に示している。

祭祀空間の北東側で検出された灰層のすぐ下からは、トトラを組み合わせた藁の塊が出土した。ラクダ科動物の毛で作られた細い縄によって、小さな塊状に縛られていることがはっきりと認識できたが、丸太には中程度の太さの縄が絡まっており、この縄からはリュウゼツランの植物繊維が同定された。灰層の下にある床面上では、長さ45～72cm、太さ3.5cmの炭化したチョンタが積み重なって密集していた。発見され

11　葦などの植物の骨組みに泥を塗った、アンデスの伝統的な土塗り壁のことである。

たチョンタは全て、一端が尖っており、もう一端は平坦であるか丸みを帯びていた。そのすぐ近くでは、焼け焦げた部分のある丸太の一部が地面に突き刺さった状態で出土したが、これは柱と思われる。このような遺物とともに、炭化したトウモロコシの穀粒が焼け跡の中に散乱していた。

建築北側の中央部では、最も代表的なコンテクストが明確に同定された。ここでは50本近く積み重なったチョンタ製の槍とともに、かなりの量の藁、トトラ、細い丸太や太い丸太が絡み合って結ばれている状態で検出された。おそらく、焼却によって焼け落ちた屋根の一部であろう。メリッサ・ニャカリ（Ñacari 2019）の分析によれば、同定された木の種類はハンノキ（*Alnus acuminata*）が最も多く、コショウボク（*Schinus molle*）とチャチャコマ（*Escallonia resinosa*）がそれに次ぐ割合を示した。ハンノキは丸太が真っすぐで長いため、屋根作りに使用された建材だったと考えられる。チャチャコマは燃料として使用され、非常に長持ちする。

D字形の小さな構造物に囲まれた床面に石製の円柱が立てられており、これによりD字形神殿の機能の一部が解明できた。筆者らは、これを日時計またはインティハワナ（太陽の動きが見える場所という意味）と呼んでいる。この構造物は建築の中央部南東寄りに位置し、粘土とポゾランの混ざった泥漆喰で覆われていた。D字形の小さな構造物の直径は2.36mあり、石製の円柱の直径は26cm、床面からの高さは85cmあった。

最後に、北西側の壁際で検出された同様のコンテクストについて述べておきたい。ここでは、先述の例と同様の遺物が少ないながらも見つかっているが[12]、細い棒を絡み合わせて作られた籠が1点発見されており、おそらく中身があったが火で完全に焼失していた。

床面上で発見された様々なコンテクストに伴う遺物の内容から、放棄に関わる儀礼的行為が行われたことは明白であり、戦士が武器として使用した先端の鋭利なチョンタ製の槍の他に、おそらくチョンタ製の弓も大量に焼却された。

こうした状況は他のワリ期のD字形神殿ではあまり見られないため、この建築は都市ワリに居住していた専門的な共同集団の1つである、槍や弓矢を主な武器とした戦士に対応すると思われる。さらに、チョンタはセルバ（東部森林地帯）に生育する植物であるため、戦士たちがアマゾン地域と何らかの繋がりを有していた可能性を補足できる。セルバの領域は、ワリの人々にも知られており、クスコ県のビルカバンバ谷での調査結果は、ワリの人々の存在をはっきりと証明している（Fonseca Santa Cruz & Bauer 2020）。彼らはそこに行政センターを築き、そこからチョンタだけでなく、コカ、果物、鳥の羽根など、この地域特有の資源がもたらされた。

放棄に関わる儀礼的行為として、建物を燃やして破壊することもあった。燃やされた藁やトトラなどは建築の屋根葺きのために、様々な太さの丸太は構造上の負荷を支えるために使用されたものだった。このような行為は、D字形神殿の権威が失墜したことを意味しており、神殿はおそらく、都市を支配した権力集団と関係する専門的な共同集団に対応していたのだろう。

床面上のコンテクストを記録して取り除くと、高温燃焼の痕跡がはっきりと残っている床面を観察することができた。その色調は赤みがかったオレンジ色から、あまり焼けなかった箇所のクリーム色まで様々であった。確かなことは、焼却行為が放棄時だけではなく、神殿が機能していた期間中にも、儀礼の一環として行われたということである。

床面全体を発掘すると、様々な直径や深さの29の穴が床に掘り込まれていることが判明した。その中でも、3つの穴は特に際立っていた。1つ目は、日時計の台座部分に掘られた穴で、柱が1本埋められていた。2つ目は、建築の南東側に掘られた穴で、焼け焦げたウミギクガイの貝殻の破片と大量の灰を含んでいた。3つ目は、建築内の北東側の床下30cmの深さから掘られ、内面に石が張られた墓であるが、攪乱されていて中身は何もなかった。

最後に、建築の北側中央部に位置する穴を取り上げる。この穴は、出入口を有し、内部に壁龕を伴い、壁に上塗りが施された前の時期の長方形の部屋の発見に繋がった（図17）。この部屋は、壁を傷付けないよう、石やポゾランの塊を、平らな面を壁に向けて均一に並べて丁寧に埋められていた。この壁龕付きの長方形の部屋は南北方向を向き、おそらく小さな基壇の上に建っており、そこから石と泥で造られた5段の階段を通って他の空間に降りることができた。ポゾラン製の

12　見つかったのは「灰、焦土、炭化物の破片、太い縄と細い縄の破片が集中する地点である。その上には灰層があったが、これは藁や、束ねられて絡み合った細い丸太と真っ直ぐな丸太が焼却されたことによるものである」（Ochatoma et al. 2015: 75を参照）。

非常に平坦かつ固い床が張られていた。焼け跡を伴う床面からこの床までの高低差は2m あり、その間には厳選された大量の石が、水で固められた土で丁寧に埋められていた。この床下から最初期の建物の基礎が検出されたため、ワルパ期、ワリの初期、そしてD字形建築が建設されたワリの最盛期という 3 度の建設時期があったと推測される。

D字形建築の南向きの出入口の外側には、D字形建築の直線壁に沿って、板状の石が敷かれた小さな基壇が存在し、その中央部の 6 段の階段を通って広場に出られる（図18）。その右側には小部屋群や円形建築があり、左側には上塗りと白い塗装で入念に仕上げられた長方形の部屋が複数ある。特に目を引くのは、壁龕を伴う赤く塗られた壁の小部屋群が、不規則な平面プランの建築空間に伴っていることである。そのうち最も大きな部屋の床面は、水路に繋がる集水孔に向かって傾斜している。

図17　内部に壁龕を伴う長方形の部屋。後にD字形神殿を建設するために意図的に埋められた

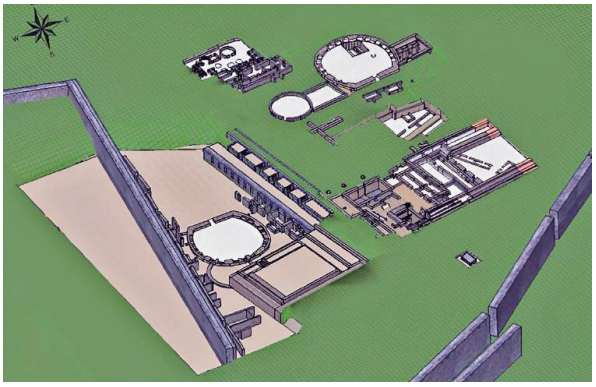

図18　ベガチャユフ・モホ地区の複数の神殿の３次元復元図（クリスティアン・バルガス作成）

発掘調査の証拠に従えば、D字形建築は権力の建築（arquitectura de poder）に関係する、記念碑的な建築物であると言える。その建材や建築の規模、建築的要素は、この建築物が宗教や天文学に関わる儀礼に関係する機能を果たしていたことを示している。祖先崇拝は、建築内で行われた活動の 1 つで、壁龕に祖先のミイラが安置され、一連の儀礼を通して崇拝されたのかもしれない。一方、ほぼ対称的に東西側と南側を向く16の壁龕があり、建築の中央部に日時計のインティハワナを伴っていることから、時間を管理するための天文観測所のような機能も果たしていた可能性がある。

２　D字形の空間
――彩色壁画と階段を伴う小型の神託所

このD字形建築は、都市ワリで既に知られているD字形建築に比べて非常に小規模であることから、支配者か神官の神託所（oráculo）だったと思われる。チョンタ製の槍が燃やされた神殿の後方（北側部分）から約15m 北西に位置し、見事に加工された石造りの階段を伴う通路を通って下りることができる（図19）。

D字形建築の寸法は、東西方向に内径5.76m、外径7.85m であり、南北方向に内径5.33m、外径7.66m である。壁の厚さは 1 ～1.18m で、床面からの高さは1.40m である。壁は普通の石積み[13]（mampostería ordenaria）で築かれており、縦 3 列、横 7 ～10列から

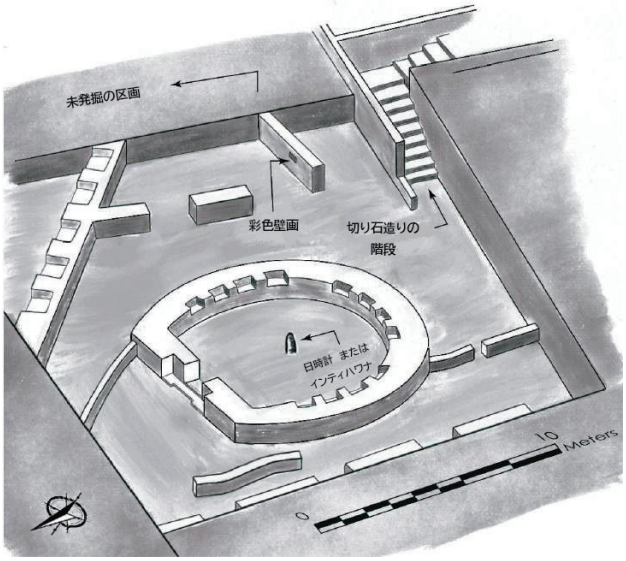

図19　石造りの階段と彩色壁画を伴う小型の神殿の３次元復元図

13　多少の差こそあれ同じ大きさの平石や割石を、壁面に平らな面を向けて積み、隙間に板状の小石を詰めてモルタルで固める技法である（Benavides 1984: 44–45, 1991: 58を参照）。

構成される。様々な大きさの平石を泥モルタルで固めて建てられた。出入口は北向きで二重側柱を伴う一風変わった構造で、長方形建築の小広場に面している。

内部には12の壁龕があり、その寸法は高さ98cm、幅84cm、奥行き56cmである。床面からまぐさをはめ込む壁龕上部の石までの高さは、平均1.28mである。

壁龕は東側、南側、西側に4つずつ均等に配置されている。建築の内側と外側の両方に泥漆喰と白い塗装が施されているが、床面上には円筒形の構造物が立てられた日時計が存在したことを示す証拠はなく、焼却が行われた痕跡もなかった。建築の規模から判断すると、おそらく全体が屋根で覆われ、通路やネコ科動物を描いた彩色壁画の痕跡がある側壁にも、屋根がかかっていたと思われる。

この建築の出入口は、ポゾラン・珪藻土製の保存状態の良い床面の上に二重側柱が建っている点で一風変わっている。内側の側柱は長さ1m、幅56cm、高さ52cmである一方、外側の側柱には高さ10cm、長さ2.10m、幅45cmの小さな階段が2段付いている。

これらの建築物は、細粒の締まっていない土や少量のポゾランの塊で埋められていたが、上塗りを傷付けないよう配慮されていたため、埋め立ては意図的かつ計画的なものであったと考えられる。埋め土に含まれる遺物はわずかであり、チャキパンパ様式やワマンガ様式の壺（cántaro）、長頸壺、浅鉢があった。散乱した状態のラクダ科動物の骨も少量出土した。

この埋め土を取り除くと、乳白色のポゾラン・珪藻土製の床面が検出された。床面全体は清掃されており、東側に10の穴の跡が集中していた一方、西側は良い保存状態であった（図20）。この穴を発掘すると、石混じりの埋め土が入っているだけだったが、その断面から、予め均して踏み固められた地山の上に、床面が3枚重なるという層序を明らかにすることができた。

私的な[14]神託所の外側には、部分的に発掘された部屋群の他、より大きなD字形建築がある南東方面から下りて来る、14段の精巧な石造りの階段付きの通路が存在する。これは上塗りと白い塗装が施された幅1.10mの狭い通路であり、数段の基壇の中間を通り、L字のように途中で曲がり下る（図21）。南北方向の最初の部分は保存状態の良い見事な6段の階段で、踊り場の部分で90度曲がる。東西方向の2つ目の部分は、使用されて一部が損傷した8段の階段であり、D字形建築の南の通路に繋がっている。おそらく階段は元々赤く塗られていたが、それが使用される内に徐々に消えていったために、階段の角や段差の一部に塗装の跡が残っているのだろう。

最後に、階段下部の最初の4段に、通路の床面まで及ぶ焼却の跡が複数検出されたことに触れなければならない。藁、縄、細い丸太や太い丸太などの炭化した有機物や灰が集中しており、側壁の一部は火が当たって黒く変色していた。他の共伴遺物には、ワマンガ様

図20　通路と石造りの階段を伴うD字形神殿の平面写真

図21　狭い通路内の切り石造りの階段

14　personalの訳であり、オープンな設計の公共祭祀建築ではないことを示している。

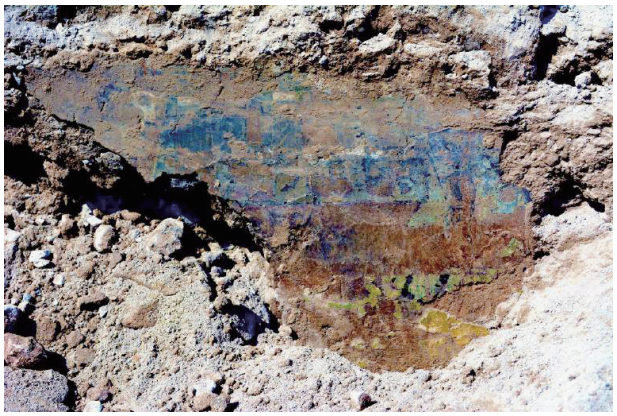

図22　一部が検出された彩色壁画。ネコ科動物１体を表現したものと思われる

式の土器片、ポゾラン製の左官コテ（emparejador）１点、黒曜岩の製作残滓、叩き石１点、少量のラクダ科動物の骨がある。

切り石造りの階段の北に位置する壁の外面には、彩色壁画の痕跡が見つかった。都市ワリでこれまで前例のなかった唯一のものである。壁画は一部が検出された後、確実に保存するために全て埋められることとなった（図22）。横向きのネコ科動物１頭の全身像を表現したものと思われ、茶色の壁に、尻尾、後ろ足、前足、頭の一部が描かれている。使用された色は、白色、灰色、黄色、黒色である。検出された壁の長さは60cm、高さは37cm だった。

階段は、おそらく基壇の土留め壁に囲まれた狭い通路に続いており、階段を下りるとD字形建築の後方に出る。D字形建築に接する２本の壁は、西側に回り込むための出入口を形成しており、その先に３つの出入口や壁龕を伴う未発掘の直線的な壁がある（図19、20）。D字形建築の直線壁と出入口がある北側には、広場のような長方形の部屋があり、わずかに弧を描く壁によって切り取られている。この曲線壁は、後に基壇を造るため、あるいは埋め立てるための土留めの役割を果たした。

神託所と思われる建築を取り巻く空間は、部屋群に囲まれており、そこには階段が通じている。完掘されていないが、周囲の部屋には出入口や壁龕の痕跡が存在する。

Ⅲ　カピリャパタ地区

この地区はワリ遺跡複合の北端の標高2,685m の場所に位置し、ケブラダ・デ・オコパ（オコパ渓谷）と呼ばれる急傾斜の崖に沿って建つ周壁に囲まれている。

高い壁に囲まれた地区内には大規模な建築空間があり、その中でも特筆すべきは長さ100m 以上もある中窪の地形である[15]。この場所の高い壁に接しているピラミッド状基壇は、おそらく海岸部の大神殿にあるピラミッド状基壇と同様の役割を果たしていたのだろう。長細い大広場にも類似している中窪の地形は、周囲を非常に高い壁に囲まれており、台形の平面プランを持つ。その北端にある壁によって、大きな四角形建築[16]に続く前庭通路（pasaje vestibular）から隔てられている。四角形建築の東側の高い壁には小さな壁龕が多くあり、そこにはティアワナコ遺跡の「ほぞ付の頭像（“cabeza-clava”）」に似た、石製のほぞが差し込まれていたのかもしれない（Lumbreras 1974: 130を参照）。これまで原位置で発見されたものは１つもないが、アヤクーチョ地域博物館には、ワリ遺跡で見つかったほぞ付の頭像が１点あり、一端がネコ科動物の頭になっている。おそらく壁に差し込まれた構造物の１つだったのだろう。

この地区はこれまで発掘されたことがなく、情報がなかった。踏査に基づく記述の他に、壁の特徴や広い空間の規模に関する報告に限られていた。この地区は、南側をベガチャユフ・モホ地区と接しており、ワリ遺跡の聖域において神々や祖先を崇拝するための広大な地区の一部となっている。

この地区で行われた調査の結果、３つのD字形の祭祀建築が見つかり、おそらく広い空間を取り囲む高い壁のすぐ近くに、もう１つ存在すると思われる。これらの建築が建てられた土地は緩やかな傾斜地であるため、基壇を造って地面を均した上に、祭祀建築やそれに伴う一連の建築空間が建てられた。この建築空間は、漆喰と乳白色の塗装できれいに仕上げられている。

１　錘重が出土したD字形建築

最も良い保存状態にあったD字形の祭祀建築の１つであり、大量の石や、サボテンやこの地域特有の低木

15　図２における Sector 2を指している。
16　図２における Sector 3を指している。

図23　錘重が出土したD字形建築の平面写真

から成る濃い植生に覆われていた（図23）。この建築は、体系的な踏査の後、地表の複数の痕跡を基にして発見された。外側には部屋群が接し、出入口はより小規模な他のD字形建築に続く広大な広場に面している。石造りの階段と彩色壁画を伴うD字形建築からは約50m北に位置する。

この建物の寸法はベガチャユフ・モホ地区の例とは少し異なり、外径は南北方向に21m、東西方向に20m、内径は南北方向に17.86m、東西方向に16.86mである。周りの壁の厚さは平均1.60mである。

石積みの種類は混合石積み[17]（mampostería mixta）である。四角形・長方形の一面に軽く切り石加工を施した大きな石材と、壁面に平らな面を向けて配置した中程度の大きさの割石または板状の石を組み合わせ、その隙間に石屑のような小石を大量に詰めている。

この神殿を発見したことで明らかになった重要な情報の1つは、大量の埋め土で覆われていた北西向きの壁の保存状態が良いことである。壁の高さは3.85mあり、内側には高さ1.20mの壁龕が複数ある。壁龕の下面には、平石造りの持ち送り構造のようなものが壁面から突き出ており、両脇の側柱には、壁龕の屋根となる丸太が差し込まれた円形の窪みの跡があった。

内部には22の壁龕がある。そのうち18の壁龕は曲線部にあり、残りは直線部にある出入口の両脇に2つずつ配置されている。その寸法は様々であり、最も保存状態の良い部分で高さが最大1.85mあるのに対し、わずか35cmしかない部分もある。壁龕の幅は1.15～1.60mであり、奥行きは平均1.10mである。

壁の曲線部に配置された18の壁龕は5組に分かれており、それぞれの組の間は平均幅2.15mの柱によって、そして壁龕同士は平均幅60cmの柱によって分けられている。1組目は北側の5つの壁龕である。2組目は北東角の2つの壁龕である。3組目は東側の4つの壁龕である。4組目は南東角の2つの壁龕である。最後に5組目は南側の5つの壁龕である。

この他にも、もう1群の小さな正方形の壁龕があり、床面から見て2列の高さに分かれている。高さと幅は20～30cm、奥行きは25～30cmとばらつきがあり、その寸法は一致しない。建築の直線部分と曲線部分の内壁に配置されており、先述の大きな壁龕の下に位置するものと、大きな壁龕を5組に分けている柱の中央部分に位置するものがある。特筆すべきは、ポゾラン、粘土、厳選された土でできた漆喰が3層も塗り重ねられていたことであり、その厚さは12cmにも及び、乳白色に塗られていた。最初の2層には両手の指の痕が見られるが、左官コテで均した上から乳白色に塗った部分もある。壁に漆喰が何層も塗り重ねられていたことから、この神殿では内部と外部を含め、3度の改築・更新が行われたと考えられる。

地表面から確認したとき、建物は大量の石や植生に覆われていた。瓦礫の中からは、ポゾラン混じりの固い粘土の塊がかなり見つかり、そこに灰色から赤みがかったオレンジ色まで様々な色の痕跡が見られた。これは、建物が完全に放棄された際、所々が高い燃焼温度に達したためである。また、様々な大きさの石材も繰り返し発見されており、壁から崩れ落ちたものの他に、土とともに埋め立てに使用されたものもあった。この埋め土にはラクダ科動物の骨や、様々な種類の土器片が含まれており、ワマンガ様式とチャキパンパ様式を主として、わずかにビニャケ様式もあった。

埋め土からは他に、ポゾラン製の円錐形の壺栓、赤道付近の海岸に生息するウミギクガイやチュウベイイモガイ（*Conus fergusoni*）、アサリなどの海棲の貝殻の破片、漆喰を均すための左官コテ1点、尖頭器3点、叩き石として使用された丸石、黒曜岩の細片[18]などが見つかった。

この建築の中央付近では、単独で存在する不規則な乾式壁（モルタルのない壁）が検出された。石を2列

17　壁の上部や下部に大きな切り石を使用し、残った部分や隙間に、モルタルで固めながら平らな面を向けて割石を積んだ「普通の石積み」を組み合わせる技法である（Benavides 1984: 46, 1991: 59を参照）。

18　esquirlaの訳であり、石英や石などから剥がれ落ちた欠片を指す用語である（Echevarria 1981: 131）。

図24　D字形建築における錘重の出土状況

図25　ワリの建築家が使用した石製の錘重

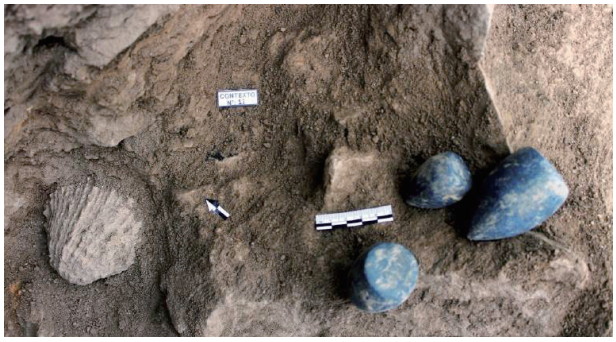

図26　出土したウミギクガイの貝殻１点とラピスラズリ製の錘重３点

積み重ねることで建設されており、その長さは8m、幅は1.2m、床上に堆積した薄い埋め土からの高さは60cm であった。この壁は石で埋め立てる範囲を区切るために使用されたものと思われ、壁の反対側では石はわずかであった。

建築内の南側の床面のすぐ近く、地表から1.80m の深さでは、様々な大きさ、形、重さの石製の錘重14点が集中する地点が見つかった。錘重は床上の石材の間に散らばっており、土石の埋め立て層の上に様々な向きで無秩序に置かれていた（図24）。

錘重は、建物の建設中に壁が垂直であることを確かめるために使用される道具である。上部が平たく、下部が円錐形になる円筒形の形状をしており、様々な石材で作られていた（図25）。円筒形部分を主として平行する刻線が胴部を一周しており、ジグザグ線が刻まれたものと刻まれていないものが存在する。また、胴部が複合形を成す錘重も２点ある。その大きさは様々であり、長さは最大で5.2cm、最小で3cm であり、直径は最大で4.1cm、最小で2.7cm となっている。

錘重の２つ目の例は、建築の北西部の石と灰を含む埋め土の上から発見された。見つかったのは、石製の独楽に似た、様々な大きさのラピスラズリ製の錘重３点である（図26）。最も大きな錘重は長さ7cm、直径4cm であり、２つ目の錘重は長さ4.2cm、直径2.4cm、３つ目の錘重は長さ5.3cm、直径3.9cm である。これらの道具に、ウミギクガイの貝殻１点が伴っていた。

大量の土石で構成される埋め土には、土石以外に、壁から剥がれ落ちた上塗りの塊が含まれていた。この建物が完全に放棄される前に大規模に燃やされて、壁の一部が崩れ落ちたのだろう。灰層や、炭化した有機物が集中する地点が存在することは、何かが灰になるまで焼き尽くされたり、不完全燃焼によって藁や植物繊維・獣毛製の縄の痕跡が残ったりしたことを示している。また、建築内の壁際の床面上には焼け焦げた丸太が密集していたため、屋根が覆っていたのは壁龕だけで、建築の中央部には屋根がなかったのだろう。

この埋め土を取り除くと、激しく損傷した固い床面が検出され、建築内に激しい焼け跡があることが分かった（図27）。床面はポゾラン、粘土、珪藻土で造られたため、クリーム色でムラのない色調であったが、火に晒されたことで、赤みがかったオレンジ色から黄色がかった色まで様々な色調に変色していた。床の厚さは５～10cm であり、その表面では、不規則に分布する様々な大きさ・深さの40の穴が検出された。床を掘り込んでいるこれらの穴を発掘したところ、建築を覆っていたのと同じ埋め土でほぼ全ての穴が埋まっていたことが確認された。土石や灰、上塗りの破片、様々な様式の土器片を含んでおり、ワマンガ様式、チャキパンパ様式、ビニャケ様式、アホ・ワイホ（Aqo Wayqo）様式の皿、鍋（olla）、壺の破片が主であった。また、破片化した乳棒や黒曜岩の細片といった石器、ラクダ科動物の骨も含まれていた。

床面の下の土石の埋め立て層が最初期の床を覆っており、さらにその床は、岩盤上の均し固められた面の上に張られていた。ここから筆者らは、最初期の床が埋められて新たな床面が張り直される、神殿の改築時

図27　全体が損傷していた床面。穴が掘り込まれ、激しい焼却が行われた

図28　上塗りと白い塗装が施された壁。壁面には指の痕が残っていた

期が1度あったと考えている。改築に伴い、壁には少なくとも2種類の漆喰が塗り重ねられたが、最後の粗い漆喰の層には様々な向きの手の指の痕があり、その上から白色の塗装が施されていた（図28）。

日時計があったことを示す証拠を確認できなかったが、それはおそらく、焼却され完全に放棄される前に、この建物が激しい略奪に見舞われたためである。焼却の祭祀に先立ち、土坑に入っていた奉納品が取り出され、その後、開いた土坑が土石、灰、炭化物、その他の遺物で埋められたと思われる。重要な発見は破壊・放棄された過程を示すコンテクストのみで、他には何も見つからなかった。

この祭祀建築の外側、具体的には出入口がある北側には、小さな長方形広場がある。側柱の横で激しい焼け跡が検出された。藁、炭化した太い丸太と細い丸太、動植物の繊維製の縄、大量の灰とともに炭化物が集中する地点が複数あり、乾式壁で囲まれていた。東側には、祭祀建築の外壁に接して建設され、上塗りを施された長方形の部屋群がある。

発見された証拠から、この建物が放棄される前に激しい焼却を伴う儀礼が行われたことは間違いない。床面に赤みがかったオレンジ色から灰色まで、様々な種類の色調が残っていたため、火の痕跡は非常に明白である。完全に放棄される最後に、放棄の儀礼の一環として焼却されたのである。何かが灰になるまで焼き尽くされた箇所もあれば、すぐに土石で埋められて火が消えたために完全には焼き尽くされず、床面上に炭化した痕跡が残った箇所もある。壁や上塗り、屋根も高温に晒されたため、崩壊を免れなかった。

2　カハマルカ様式土器が出土したD字形の祭祀空間

錘重が出土したD字形建築の北東側に位置し、距離としては約8m離れている（図29、30）。北西を向いており、東西方向に幅13.74m、南北方向に長さ13.12mである。ポゾランを主な構成要素とする地山の上に建てられており、ポゾランはその性質上、簡単に加工したり穴を掘ったりすることができた。そのため土地が均され、D字形建築の壁が築かれる場所は、壁の基礎を据えるためにさらに少し掘られた。この上に床が張られ、これが第1建築フェイズに対応する。床面を張るには、他の材料と組み合わせると高い強度を誇るようになるポゾランを使う必要があった。

出入口は北西向きで、敷居部分に大きな平石1枚で造られた低い壁があるため、直接入ることはできない。その規模から中型の建築であると考えられ、内部には18の壁龕がある他、北東側には日時計の役割を果たす石製の円柱が立っていた円形の輪が1つあった。

建築の中央部付近の床面上には、日時計として同定された小さな円形構造物（EA-11B）が築かれており、その内側には、柱のように円筒形の構造物が立てられるはずだった穴が開いていた（図31）。この床面が利用されていた期間、床には複数の円形土坑が掘られた。土坑は建築の中央部と壁面沿いに集中し、コンチョパタ遺跡のD字形建築で立証されたように（Ochatoma 2007）、土器を埋める穴として使用されたのだろう。しかし、どの土坑からも土器の奉納は見つからず、見つかったのは再堆積した埋め土であった。

締まっていない砂層の上には、無数の石や様々な時期の多種多様な土器から構成される大量の埋め土（B層）が堆積していた。土器は前期中間期のもの（ワルパ様式、クムンセンハ様式、オクロス様式）から、中

図29　建築家の錘重が出土した神殿と、ペルー北高地由来の集団に関係するであろうカハマルカ様式土器が出土した神殿

図30　カハマルカ様式土器が出土したD字建築のオルソ画像

図31　中央の穴に石製の円柱が差し込まれていた半円形構造物

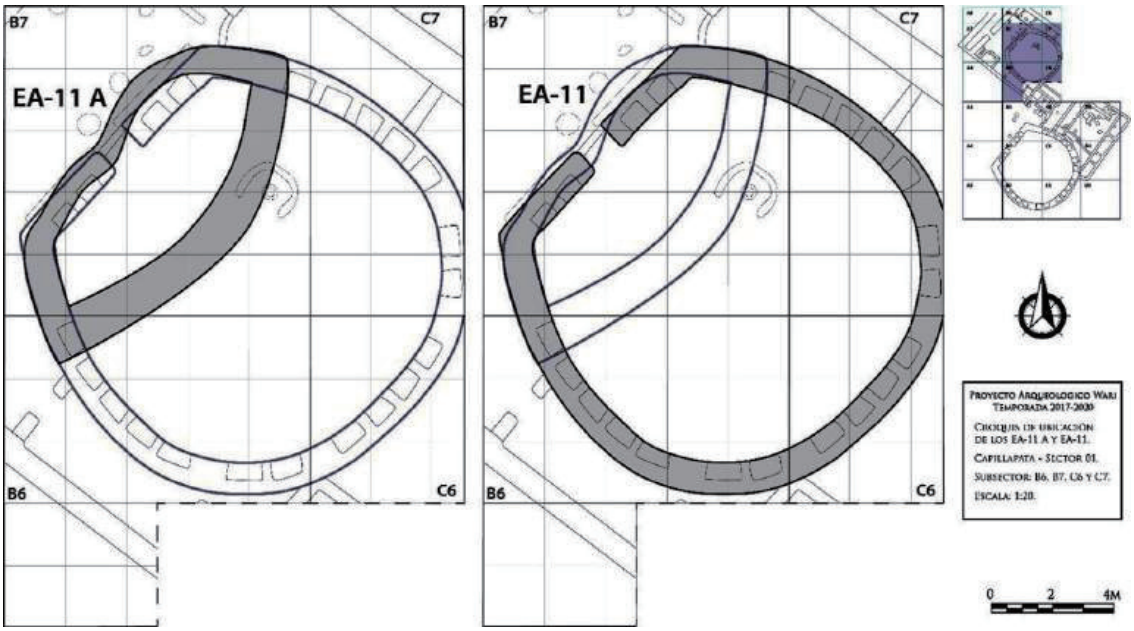

図32　D字形建築（右）と、より後の時期の三日月形建築（左）の位置を示した簡略図

図33　アリバロ形の壺。カハマルカ様式土器が出土したD字形神殿の内部を埋めていた石の中に、奉納品として置かれていた

図34　都市ワリで作られたカハマルカ様式土器

図35　ワリ遺跡で作られたカハマルカ伝統の土器片。ワリの神々の顔が描かれている

期ホライズンのもの（ビニャケ様式、ロブレス・モホ様式 Robles Moqo、ワリ黒色様式、チャキパンパA様式、チャキパンパB様式）まであった。

この建築が大量の埋め土（B層）で埋められる前に、建築の中央部と壁際にいくつもの円形の土坑が掘られ、焼却の跡が残された。この埋め土の上には、ワリよりも後の時期に2つの乾式壁が建てられた（図32）。1つはD字形建築の直線部の上に建てられた壁で、もう1つは半円形の片面壁である。2つ目の壁の基礎部分からは、奉納品として赤色の錘重1点が見つかった。この埋め土の上には、固い風成土の層（A層）が堆積している。しかし、A層とB層の境から、アリバロに似た球形胴部と外反頸部を有する壺1点が奉納品として見つかったことは特筆すべきであり、壺は板状の石が張られた小さな四角形の空間の中にあった（図33）。この壺の頸部には3本の赤色の横線が描かれており、胴部には屈曲部から底部にかけて赤色の縦線が施されていた。このような特徴から、ワリよりも後の時期の奉納品であったと考えられる。

この建築における最も重要な発見物は、ワリ遺跡で見つかった中で最大の量を誇るカハマルカ様式の土器である。それはクリーム色・オレンジ色のスリップが塗られた、典型的な開いた器形（皿、鉢 tazón、球形鉢）の高台付き土器である。形態学的・図像学的な分析により、これらはカオリン製カハマルカ（Cajamarca de caolín）とアヤクーチョのカハマルカ（Cajamarca Ayacuchano）という2つの土器群に分類された。前者は白色粘土（カオリン）で作られており、装飾はペルー北高地に典型的なもの（カハマルカ・フローラル・カーシブ様式）である。一方で、後者はオレンジ色の粘土で作られており、ペルー北高地では知られていないモチーフが組み込まれているため、カハマルカとワリの土器伝統が融合した土器群である（図34、35）。ワリの人物によく似ている、擬人化された人物像の表現などの例がある。また、土器外面には階段形モチーフや三角形モチーフ、内面には平行線を組み合わさった人物像のモチーフの装飾が目立つ。さらに、この土器群の中には、オレンジ色のスリップが塗られ、幾何学モチーフの表現を主としているサブタイプ[19]の土器群も存在する。

図36　床面を掘り込んだ穴や日時計、鹿の角が検出されたD字形建築の空中写真

3　鹿の角が出土したD字形の祭祀空間

この地区は、ケブラダ・デ・オコパと呼ばれる急傾斜の崖に沿って走る高い周壁に囲まれた、カピリャパタ地区北端の標高2700mの場所に位置する。

D字形の建築空間は、錘重が出土した祭祀建築から50m北西側に位置する（図36）。その寸法は南北方向に外径21.60m、内径17.72mであり、東西方向に外径20.80m、内径18.60mである。中央に出入口が設けられた直線部は南西を向いており、直線壁の長さは16.90m、高さは55cm～1.24mである。東側、西側、北側の壁の厚さが平均1.60mあるのに対し、南側の壁の厚さは1.50mしかない。

この建築物の壁は、保存状態が悪く崩れており、まぐさや屋根をはめ込む壁龕上部の石、壁龕の下面を確認できるだけである。そのため、先述したD字形建築と同数の壁龕があったのかもしれないが、正確な数を把握することはできなかった。北西－南東方向の大きな基壇を形成する土留め壁によって平らに均された場所に建てられている。地形は傾斜しており、東側の窪地にはおそらく階段がある。

かなりの量の石で覆われていたが、曲線壁の一部分が見えたため、この建築を同定するに至った。大量の石はおそらく崩れた壁の一部であり、サボテンや棘のある低木、ワランゴ（guarango）、パティ（pati）などの植生に覆われていた。

発掘調査を進めると、土石の埋め立て層から、白塗りの漆喰の破片、大量の土器片、ラクダ科動物の骨、石器、レンズ状の灰層が検出された。ウミギクガイの

19　1つの土器タイプをさらに細分するための分類単位である。

図37　祭祀空間内の鹿の角が密集していた地点

図38　D字形建築の直線壁に接する長方形建築

貝殻の加工品の破片41点と小ビーズ3点が集中する地点が見つかり、これらの遺物は埋め土中の石材の中に埋もれていた。そのため、この建物が焼却された後に埋められる過程で置かれたものと推測される。

分析された遺物のうち土器片は880点あり、その内訳はチャキパンパ様式(40%)、無文の日用土器(30%)、ワマンガ様式（12%）、ワリ黒色様式（10%）、ビニャケ様式（5%）、カハマルカ様式（2%）、ロブレス・モホ様式（1%）であった。石器の中で特徴的なものは、尖頭器、黒曜岩の細片、乳棒、ポゾラン製の栓1点であり、わずかであるが貝ビーズもバラバラの状態で見つかった。灰の集中部からは、炭化物の破片、少量の藁、細い縄で縛られた細い丸太、屋根に使用されたであろうトトラの残骸が見つかった。

床面を発掘すると、様々な場所で灰が集中する地点が見つかった。そのうち床面上で見つかった4つの地点から、この神殿に関係した集団との関連性を推測することができる。それは破片・完形の鹿の角が集積する地点である（図37)。これらは灰層に伴っており、建物を放棄する前の儀礼の一環として焼却されたものと推測される。1つ目の地点は北側に位置し、灰層と焦土の中に、完形・破片の角とともに、動物の椎骨、膝蓋骨、肋骨の破片があった。2つ目の地点も北側に位置し、同様に破片・完形の鹿の角14点が密集していたが、その先端は使用されたことで磨き上げられていた。ここでは角は床面上にあり、灰層に覆われていた。3つ目の地点は曲線壁の東側に位置し、破片・完形の鹿の角52点や小型尖頭器数点が、灰層に伴う形で集積していた。そして4つ目の地点は南側に位置し、破片・完形の鹿の角80点と、保存状態の悪い動物骨27点が含まれていた。

床面は固く非常に平坦で、材料にポゾラン、珪藻土、厳選された砂が使用されている。色は乳白色であるが、儀礼的活動によって物が焼却されたことで、灰色やオレンジ色に変色した部分がある。床面の厚さは4～6cmであり、2層の埋め土によって傾斜地を均した上に張られている。

床面では40の穴が検出されたが、その寸法や深さ、出土コンテクストは様々である。大多数の穴には、土石や土器片から成る埋め土以外に特別な物は入っていなかった。最も重要な穴の例をいくつか挙げると、日時計の横にある石製の円柱2本が埋められていた穴や、出土した土器片からワルパ期に位置付けられる古い建築の壁が見つかった穴、さらには床面下から平石造りの排水路の跡が見つかった穴などがある。

建築の直線部に出入口がある西側では、出入口の内側の両脇から、2本の平行する壁が発見された（図38)。それぞれ長さ5m、幅1.50mと、長さ5.40m、幅1.5mの細長い長方形の部屋を構成する壁であり、両部屋には出入口がある。部屋の内部は埋め土以外、コンテクストが検出されなかった。壁は薄く、内面と外面の両方に漆喰と白い塗装が施されていた。部屋の規模から、ベガチャユフ・モホ地区のD字形神殿と同様に、部屋内には祭祀のために飲み物が入った壺が保管されていたと思われる。

出入口の外側には、通路か広場のような場所があるが、完掘されていない。その北側の外壁には焼け跡が確認されている。北側には、きれいに仕上げられた長方形の部屋が3つ発見されており、部屋内の壁龕の周りには浮き彫りが施されていた。おそらく神殿や儀礼的活動に関連する空間なのだろう。

Ⅳ　オコパ地区

オコパ地区は、カピリャパタ地区から約900m東側の、アヤクーチョーキヌア幹線道路に隣接する谷近く

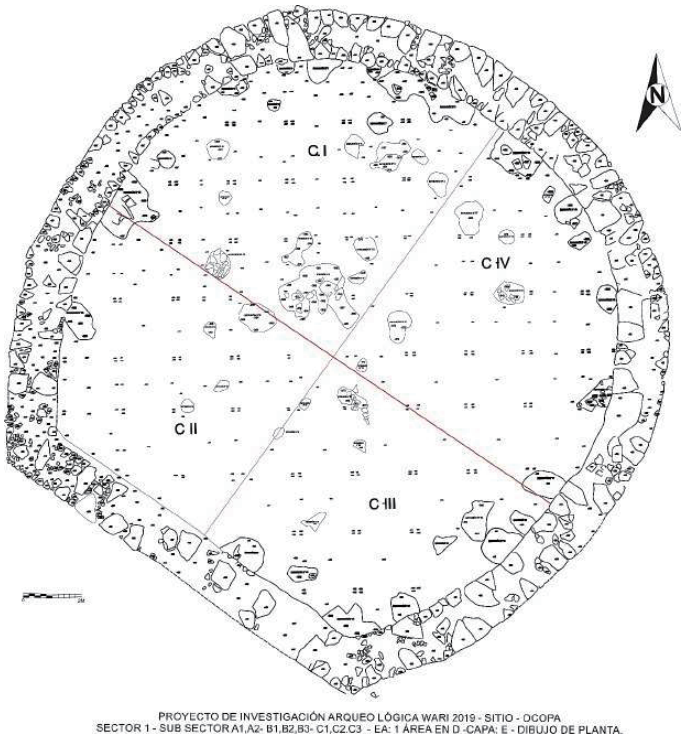

図39　オコパ地区のD字形建築内の、穴を掘り込んだ床面の平面図

図40　オコパ地区のD字形神殿の床面を掘り込んだ穴

の標高2689mの場所に位置する。北側は、ウシュパ・ホト（Uchpa Qoto）地区[20]の高所から下って来て崖際を走る壁が境界を成しており、西側のカピリャパタ地区とは、一種の通りを形成する壁で隔てられている。

D字形建築は、体系的な踏査によって発見された。生い茂る低木とサボテンで完全に覆われていて、茂みの中に壁の一部分だけが見えていた。地表は少し傾いており、東から西に向かってわずかに窪んでいる。

D字形神殿の外径は東西方向に20.40m、直線部では南北方向に14.35mである。内径は17.60mで、直線部では12.40mである。出入口は南西向きの直線部に設けられている。建物の壁は損傷が激しく、北側では床面からの高さが1.93mあるのに対し、南側と西側では高さが23cmしかない。壁龕は見つからなかったが、壁の最上部に壁龕が存在したことを示す形跡がある。

この建築空間を取り囲む壁は、混合石積みの技法で建てられている。基礎部分に大きな切り石が据えられ、その上部に泥モルタルで固められた中程度～大きなサイズの石材が積まれ、それらの中間部分には切り取られた小さな板状の割石が使用された。南側を中心として内壁の所々には、厚さ12～20cmの漆喰の痕跡が見られた。

発掘調査から、この神殿は激しく燃やされた後、土石で埋められたことが判明した。埋め土の中からは、激しい焼却の結果として壁から剥がれ落ちた漆喰と上塗り、焼け焦げた板状の石から成る塊が発見された。土器片が密集する地点が3つも発見され、最も代表的な地点では、チャキパンパ様式の人面頸部壺1点や、炭化したラクダ科動物の骨、黒曜岩のナイフ2点、青銅製のトゥプ1点が見つかった。

床面上では、焼却によって生じた灰が集中している地点が16カ所検出され、瓦礫が床のほぼ全面を覆っていた。最も重要なコンテクストは南西側にあり、直径3mの不規則な形をしていた。このコンテクストは、暗灰色の締まっていない厚い灰層で、石と赤みがかった色のポゾランの塊を含んでいた。この層には、大量の炭化物の破片や、その他の完全に焼き尽くされなかった物があった。また、植物繊維・獣毛・藁製の編み縄など、炭化した有機物の残骸もあった。

このようなパターンは、他の灰の集中部でも繰り返し見られる。有機物の大部分が焼き尽くされ、藁の残骸、縄、細い丸太や太い丸太、土器片、少量のラクダ科動物の骨などの痕跡が残った。

床はおそらくポゾランと粘土で造られており、南東側と北東側に向かってやや傾斜している。床の表面には、焼却が行われたためオレンジ色、灰色、あるいは黒色に変色した部分が見られる。内部に日時計が存在した痕跡が見つからなかったことを述べておきたい。

床面では、様々な形状と深さの50の穴が検出されたが（図39、40）、その中には、神殿の建設前に岩盤に掘られた2つの水路があった。また、加工した小さ

20　図2には記載されていないが、オコパ地区の約800m東に位置する地区である。

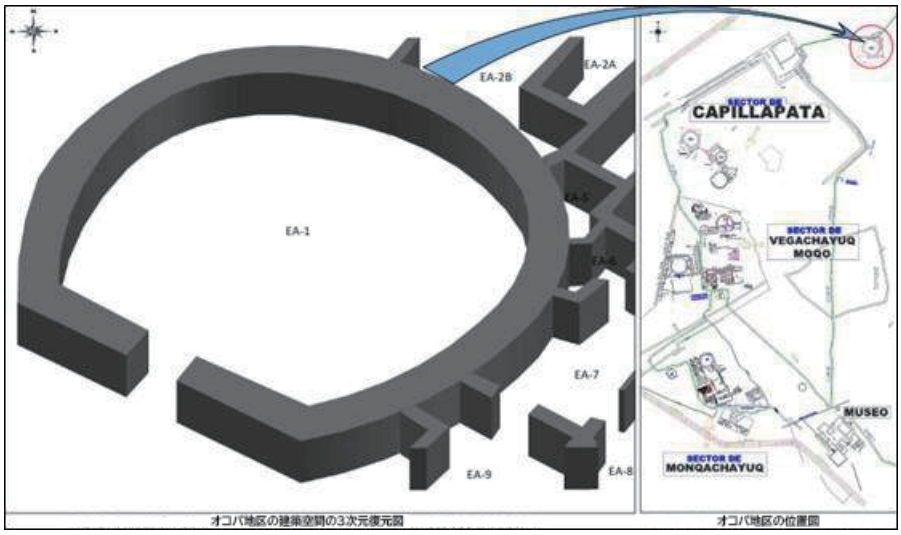

図41　オコパ地区のD字形神殿の３次元復元図

なポゾランの塊から造られた水路も１つあり、北東から南東に向かっている。おそらく、これらの水路は相互に連結し、雨季に排水する役割を果たしていたのだろう。

他に特筆すべきは、床を掘り込んだいくつもの穴である。それらは開口部が様々な大きさの円形の、岩盤まで掘り込まれた土坑であり､形はほぼ円筒形である。ほぼ全ての土坑から遺物が見つからなかったため、土坑は過去に盗掘されたと考えられる。しかし、穴の複雑な形や大きさから、一部の穴は柱穴として使用された可能性がある。より大きな穴は、儀礼で奉納品を入れる器として使用された可能性がある。

この建物は小さな傾斜地に建てられ利用された。床下には先行する建築の跡が一切なかったため、この建物は都市の最盛期に建設されたと推測される。その論拠は使用された建材であり、大きな円形壁には、泥モルタルで固められた大きな割石の他に、他の建物から抜き取られて再利用されたと思われる、長方形の切り石があることがはっきりと観察できた。

このD字形建築を覆う地層から出土した遺物は、少量の日用土器の壺の破片、ビニャケ様式やロブレス・モホ様式に分類される精製のコップや浅鉢であり、チャキパンパ様式とワマンガ様式の土器も少量あった。

D字形建築の完掘により、この建物は単独で存在するのではなく、外壁に接した複数の長方形建築と関連していることが判明した（図41）。これらの長方形建築は、祭壇や神聖な場としての役割を果たしていたのかもしれない。D字形建築が、神々や祖先への祭祀が行われた神殿として機能していたことは明白である。

床面上の所々に焼け跡があり、そこに藁や動植物の繊維製の縄と思われる残骸が伴っていたため、内部で儀礼が行われたことは間違いない。火に晒されて攪乱されたことによる考古学的記録への影響もあるが、日時計や、特定の専門家集団に関係すると思われる遺物を含むコンテクストがなかったため、これまでの事例と同様には関連付けをすることができない。

この祭祀建築の規模が、ベガチャユフ・モホ地区やカピリャパタ地区の祭祀建築と一致することから、これらの建物は、同一の建築家または専門家によって設計されたと推測される。建材に関して若干の違いはあるが、おそらくこれらの建物は様々な権力集団のものであり、各々の集団が自らの神殿を建設し私的な儀礼を行ったのだろう。ワリ遺跡の聖域と呼ばれる地区にある祭祀建築の規模と数から、ここには大群衆が集っていたのではなく、自らの神殿を持つ専門家集団またはエリート集団が集ったと推測される。

最後に、繰り返し見られるパターンを振り返ると、この建築は祭祀建築として機能し、先述の例とほぼ同じ状況で放棄されたことを指摘できる。繰り返しておくが、こうした状況は、激しく焼却して意図的に埋め立てる、大規模な放棄儀礼によって生じたのである。

V　モンハチャユフ地区のD字形神殿

ベガチャユフ・モホ地区の南側に位置し、２つの壁に挟まれた大通りによって隔てられている。ここには陵墓２つ、埋葬用の地下回廊、建設途中の陵墓１つが存在する。D字形建築はこの埋葬施設複合の中ではなく、そこから約50m西側の地点に位置する（図42）。このD字形建築は、1977年にフランシスコ・ソラーノが出入口付近の南東側と西側に２つのトレンチを設け、一部を発掘した場所である（Solano & Guerrero 1981）。ソラーノらは切り取られた円形建築として記述し、内部に18の壁龕を備えたD字形の平面プランを持つと述べている。

筆者らはワリ遺跡の聖域で行った調査の一環とし

図42　モンハチャユフ地区のD字形建築の発掘前の写真

図43　モンハチャユフ地区のD字形建築の発掘中の写真

図44　地山に掘られた水路と、埋め土で覆われていた壁

図45　修復後のモンハチャユフ地区のD字形神殿

て、この空間の用途、共伴遺物、機能を明らかにするために面的発掘を実施し、深く掘り下げた（図43）。D字形建築の内径は10m、外径は11.50mであり、西向きの直線部には幅1.10m、高さ1.52mの出入口が設けられている。内部には18の壁龕がある。出入口の両脇に壁龕が2つずつ配置され、曲線部の14の壁龕は、北側の5つ、東側の4つ、南側の5つという組に分かれて配置されている。

壁の幅は68～71cmであり、壁は2列から構成される。壁には不規則な形や角の尖った形の割石、小石、いくつかの切り石が使用されたため、混合石積みに相当する。また、壁の中央部には再利用された切り石も見られる。内側と外側の壁面には、漆喰と乳白色の塗装が施されていた部分が見られる。

発掘調査の結果、1977年のソラーノによる発掘調査や盗掘者による略奪行為によって、建築内の地層は酷く攪乱されており、北東側の床の大部分が掘り込まれていることを確認することができた。床面の厚さは8～10cm、明るいクリーム色で、ポゾランと砂で造られている。

埋め土の中の約2mの深さに、直径20cm、高さ95cmの石灰岩製の円柱があった。壺、長頸壺、浅鉢を中心とするチャキパンパ様式の土器片や、コンチョパタ様式の甕、ワリ黒色タイプのコップと浅鉢、ワマンガ様式の皿、球形鉢、長頸壺、鍋の破片が共伴していた。また、玄武岩や黒曜岩の剥片や石核などの石器もあった。

もう1つの特別な発見物は、二次埋葬の集合墓である。これは建築南東側の深さ2.20mの地点に位置し、バラバラの人骨が集中していた。人骨は劣化が進んでおり、子供の門歯・犬歯・大臼歯の付いた下顎骨や、肋骨、大腿骨、頭蓋骨の破片、大人の大臼歯・小臼歯の付いた下顎骨、指骨、脛骨、橈骨、骨盤、椎骨の破片などが同定された。また、このコンテクストに伴って、クイ2体に相当する動物骨も検出された。共伴遺物は、ワルパ期の様々なタイプの土器片や、オクロス様式、チャキパンパ初期様式の土器片である。

最初期の床面の下には、岩盤を覆う土石の埋め立て層があり、そこから長方形の部屋の壁の跡や、南東から北西に向かう水路が検出された（図44）。岩盤を掘って水路が造られ、その側面には泥モルタルで固めた平石と丸石が張り付けられていた。水路には平石の蓋が

置かれ、泥で封鎖されていた。

発見時の状態では、床面に立てられていたはずの円柱を原位置で確認できなかった（図45）。同様に、激しい攪乱のため、床面が2枚あることを一部でしか確認できなかったが、少なくとも1度の改築過程があったと推測される。これらの固い床の下には直線壁が2本あったため、D字形神殿の建設以前のワルパ期に利用されていたと考えられる。この時期には、少なくとも2人の人物が埋葬されていたようであるが、その人骨は酷く劣化していた。また、岩盤に掘られた排水用の水路を伴っていた。

発見された証拠に基づくと、ワルパ期とD字形神殿が建設された中期ホライズンの2時期の利用があった。ワリ遺跡の聖域で最も重要な墓域の近くにあることから、おそらくこのD字形神殿は祖先崇拝と関係していたのだろう。すぐ近くには、2つの非常に重要な陵墓や埋葬用の地下回廊があり、回廊内には、墓であったと思われる円筒形の穴が岩盤に掘り込まれている。残念ながら、文化的要因のために、無傷の状態で発見された墓は1つもなかった。おそらく盗掘されたか、あるいはこの社会が危機と崩壊を迎えた時期に、冒涜から守るために人骨がより安全な場所に移されたのであろう。

Ⅵ　結果と議論

ワリ遺跡の宗教建築に特有の特徴の1つはD字形の平面プランを有する建築物であり、ベガチャユフ・モホ地区で1982年に初めて発見された。このような建造物は、10年前までワリ文化が独自に生み出したものと見なされていた。これまでに首都ワリと地方の遺跡で発見例が増えてきた。現在のところワリ遺跡ではD字形神殿が8つ[21]確認され、各神殿内の出土コンテクストに基づいて、その機能が徐々に解明されつつある。首都ワリ以外では、モケグア谷のセロ・バウル（Cerro Baúl）遺跡、クスコ県ビルカバンバ谷のエスピリトゥ・パンパ（Espíritu Pampa）遺跡、ルカナス谷のヤコ（Yako）遺跡、アンカシュ県のホンコパンパ（Honcopampa）遺跡、ナスカ谷のワカ・デル・ロロ（Huaca del Loro）遺跡、ランバイェケ谷のワカ・サンタ・ロサ・デ・プカラ（Huaca Santa Rosa de Pucalá）遺跡、アヤクーチョ地域のコンチョパタ遺跡やニャウィンプキオ遺跡などで、D字形建築が報告されている。これらはワリの拡大過程で設置された地方の遺跡である。こうした神殿の周りには、広場やきれいに仕上げられた長方形の部屋など、中心の空間での儀礼を補完する活動の場がある。

ワリ社会の発展の背景において、D字形建築が出現したことは非常に重要である。というのもアヤクーチョ地域では、ワリの1つ前の時期の円形の祭祀建築以外に、おそらく直接的な原型がないのである。ベガチャユフ・モホ地区で初めて神殿が見つかり、その機能に関してゴンサーレス・カレとブラガイラックが最初の仮説を提唱した。それによれば、神々と交信するための場、つまり神々を奉り祭祀が行われた儀礼空間であるという（González Carré & Bragayrac 1986）。

ホセ・オチャトマとマルタ・カブレラ（Ochatoma & Cabrera 2000）は、二次センターであるコンチョパタ遺跡において、D字形建築を初めて本格的に発掘した。この調査では、意図的に割られた精製の甕や壺の土器片の夥しい集積がいくつも検出されたが、それらは大規模な焼却を含む神殿放棄の儀礼の一部であった。壁は酷く破壊されていて壁龕の痕跡はなかったが、出入口が設けられた直線壁が北向きであることをはっきりと確認できた。床面は固く、西側にある小さな窪みには、大型の尖底壺の底部が嵌まったままだった。また、床面に円筒形の構造物が立てられた日時計や、生贄にされたラクダ科動物、そのすぐ近くでは前頭部に穴の開いた人間の焼けた頭蓋骨が発見された。割られた土器に描かれた「杖の神」の頭部、筏に乗る戦士、エリートの人物像など、目新しい図像表現は特筆に値する。以上の建築的特徴やコンテクストから、この場所が祭祀空間であり、神々や祖先への祭祀・儀礼が行われたことは疑いない（Ochatoma & Cabrera 2000）。

ウィリアム・イズベル（Isbell 2001）は、都市ワリのD字形神殿について、ビスタ・アレグレ期（fase Vista Alegre）の終わりからケブラダ・デ・オクロス期（fase Quebrada de Okros、紀元後550～700年）の初めにかけて、アヤクーチョ地域と、ワリの影響下で建設された遺跡に現れたと指摘している。彼はこの祭祀建築を中期ホライズンの初めに出現した新たな宗教と関連付け、ティワナク文化によって持ち込まれた新しい

21　現在までに公表された情報では、ワリ遺跡で発見されたD字形建築は計10ある。その内訳は、ベガチャユフ・モホ地区の3つ、カピリャパタ地区の3つ、オコパ地区の1つ、モンハチャユフ地区の2つ、チェホ・ワシ地区の1つである。

図像と結び付けている（Isbell 2001）。

フランク・ミデンスとアニータ・クック（Meddens & Cook 2001）は、D字形建築がその遺跡の儀礼や行政の特徴を想起させると述べる。これらの建物は祖先崇拝の1つの形であり、建物後方の曲線壁の内側に設けられた壁龕にはマルキ、つまりミイラが展示されていた可能性がある。内部に壁龕があるものとないものがあるが、一端が直線になった円形という建築形態の建物の機能に関して3つの仮説が提示されている。1つ目は、建築の大きさが男女のデュアリズムに関係していたという仮説であり、より大きなものは太陽、小さなものは女性や混沌、下の半族に結びついていたのかもしれない。2つ目は、死者や祖先の崇拝に関係しているという仮説であり、ワリ遺跡のチェホ・ワシ地区、ニャウィンプキオ遺跡、コンチョパタ遺跡、ヤコ遺跡のD字形建築に埋葬人骨が伴っていたことを根拠としている。そして3つ目の仮説によれば、政治的・宗教的な繋がりがあり、この場所でエリートのミイラが慎重に置かれて目に触れるようにされ、国家権力が正当化されたという（Meddens & Cook 2001）。

クック（Cook 2001a）は最初の仮説を補足して、これらの建物は神聖な役割を担っていただけでなく、儀礼的な奉納品であるパガプや、アンデスの神々の中で最も重要な「生贄を捧げる者（Sacrificador）」に関係していたという考えを付け加えた。クックが主な根拠としたのは、ある人面頸部壺に描かれた図像表現である。壺には何体もの「生贄を捧げる者」、あるいは「首を切り落とす者（Degollador）」（Cook 2001b）の姿があり、壺の胴部中央には「ドーム状またはD字形」の図像が描かれている。この図像は、D字形神殿の表現そのものであろう。

これまで示してきた研究と同じ流れで、パトリック・ウィリアムスとジョニー・イスラは、セロ・バウル遺跡でD字形建築を発掘し、利用時期、建設の際の配慮、出土した奉納品を基に、儀礼的活動が行われた祭祀建築として機能していたのだろうと指摘している（Williams & Isla 2002）。

フアン・レオニ（Leoni 2005b）は、ワリ遺跡のD字形建築が、ワルパに典型的な円形の祭祀建築と半円形の祭祀建築が融合したものであると説明した。レオニは、アヤクーチョ地域の祭祀建築伝統が、前期中間期に始まって中期ホライズンまで続いたため、ワリのD字形建築の起源はワルパの祭祀建築に遡ると指摘した。D字形建築には、アルティプラーノの影響を受けた国家宗教が取り込まれたのだが、ワルパの宗教に基づく重要な性格を維持し、エリートに限定するような排他的な性格を強調した建物だった。

エスノヒストリーの視点から、クック（Cook 2015）は16〜17世紀の様々な記録文書（クロニカ）に記述されたワカ、特に墓と結びついたワカと、円形の神殿と結びついたワカに注目した。彼女は前期中間期の祭祀場の形態が、ペルー海岸部と高地部の両方に見られる円形の住居建築を模倣していると指摘する。また、ワリ国家が強固になっていくにつれて、神聖な建築の形態が、円形から切り取られた円形（D字形）へと変化したという。

ランバイェケ谷のワカ・サンタ・ロサ・デ・プカラ遺跡や、クスコ県のビルカバンバ谷のセルバ地帯に位置するエスピリトゥ・パンパ遺跡でもD字形の祭祀建築が発見された。それにより、ペルー北海岸とアマゾン地域におけるワリの実態に関する、新しい白熱した考古学的・歴史学的な議論が始まった。この議論は始まったばかりであるが、新たなD字形建築が発掘された様々な地方の遺跡で、その機能や有無に関してより経験的な情報が既に得られている。

ワリ遺跡のいわゆる「聖域」内のモンハチャユフ地区、ベガチャユフ・モホ地区、オコパ地区、カピリャパタ地区で新たに5つのD字形建築が発見され、その機能に関する見解は補強された。これらの空間では、儀礼や祭祀、宗教的行為、霊的行為が行われ、神や超越的なものと繋がることが試みられたのである。

祖先や神々の崇拝は、おそらく神殿で行われた最も重要な活動の1つであり、建築内にある壁龕には祖先のミイラが置かれ、儀礼を通じて崇められたのかもしれない。ワリ遺跡のD字形神殿の全てに壁龕があったが、建築の規模や出土コンテクスト、おそらく壁龕の数にも違いがあった。平均で18の壁龕が円形部分に設けられており、一部の神殿には直線部分の出入口の両脇に2つずつ、つまり4つ加わって計22の壁龕が存在する。小型の神託所と名づけたD字形建築だけは壁龕の数が12であるが、おそらく他のD字形建築に比べて規模が小さいためであろう。屋根について補足しておくと、建築の内側の壁沿いには壁龕を保護する屋根があったが、最も小規模な建築を例外として、日時計が存在する中央部分には屋根がなかった。

また、最も小規模な建築を例外として、ほぼ全てのD字形建築に日時計があるため、天文学に関わる活動が行われたことも分かった。さらに、ベガチャユフ・

モホ地区の神殿のすぐ近くには石板が2つあり、天体や星座の動きを観測し、時間を正確に把握するための水鏡として用いられたのであろう。

D字形建築が機能していた期間や最終段階に儀礼的活動や祭祀が行われたことを、奉納品や生贄を含む一連の儀礼的埋納が裏付けている。建築が使われている間や放棄の際に建築の内外では恒常的に有機物が焼却され、火が祭祀空間で行われた祭祀の中で重要な役割を果たしていたようである。火の使用にはおそらく象徴的かつ儀礼的な意味があり、1つの時代の終わりを示し、新たな段階への道を拓いたのだろう。戦闘用の槍や建設用の錘重、加工用の道具など、個人または集団で使用される物が焼却されたため、各D字形建築は、都市に居住する専門家の共同集団に属し、各集団が神殿を有していたようである。D字形建築や広場の規模は、それが大衆のものではなく、特定の系統や姻戚関係にある小集団のものであったことを示しているようである。

この仮説は、それぞれのD字形建築で出土した一連のコンテクストに基づいている。建築の放棄は計画的に行われたが、その過程の儀礼的活動では、建築の内側と外側の両方でおそらく屋根の一部であった藁、木材、縄などの物が大がかりに焼却された。ここには、籠やトウモロコシの種子といった物も含まれていた他、他の場所では見つからない遺物を伴うコンテクストもある。例を挙げると、焼け焦げたチョンタ製の槍や弓と思われる物が密集する地点や、カハマルカ文化に由来する外来の土器片、鹿の角などである。コンチョパタ遺跡では土器製作用の土製品が見つかっており、そこで行われた活動を示している。

全てのD字形建築の外側には建築群が接しており、そこで補完的な活動が行われた。広場には、限られた集団が儀礼のために集まった。いずれも上塗りと白色の塗装が施された煌びやかな建物であり、古い建物を埋めてその上に床面を張って建てられていた。これらの建築が都市ワリの最盛期に建設され、その時期にティワナク文化がアヤクーチョ地域に存在していたという明確な証拠が複数ある。

ほぼ全てのD字形神殿に、床面を大きく掘り込む様々な寸法・深さの穴が見られた。これらは最後の焼却儀礼が行われる前に掘られた穴だったが、それより後に掘られた穴もあったようである。長く激しい焼却が行われたことは明白であり、床面が赤みがかった色調に変色し、焼かれた物体は灰となって床面上に堆積した。D字形神殿の放棄はワリ社会の歴史における1つの明確な転換点であり、権力を握っていた階級の信仰、イデオロギーの終焉を意味する。放棄に関わる焼却儀礼の後、神殿は埋め土で覆われ、再び利用されることはなかった。

最後に、筆者らはベガチャユフ・モホ地区の神殿を頂点とする階層構造があったことを確信している。城壁のような高い壁に囲まれたマウンド上に位置し、祭壇が載っている基壇があり、祭壇は側面の壁に壁龕を備え、D字形建築を伴う広場が存在する（図4）。このことから、ここは唯一かつ特別な場所となっている。同様の建築的特徴や出土コンテクストを伴う神殿は他にない。

高い壁に接した部屋群、広場に面する基壇に接した部屋群の床下には、多くの奉納品が埋められた。籠、加工途中の織物、織物生産の道具、焼いて装飾を施されたヒョウタン、バラバラの状態の人骨、意図的に割られた土器などである。さらに、浅鉢に入った状態で人間の頭蓋骨が埋められていた土坑までもあり、これは明らかに人身供儀の習慣を示している。

ワリの複雑な図像を解明する手がかりとなり、古代の帝国国家ワリについて知る上で新たな研究の方向性を拓いた発見物の1つは、人間の柔らかい臓器が表現された長頸壺である。心臓、肺、気管が供犠として取り出されていたことを見て取ることができ、このことはこれまでほとんど知られていなかった。まだ知るべきことや議論すべきことが数多くあることは間違いないが、人身供儀の社会的・政治的役割は、支配者であるエリートの権力や権威を強化し、指導者としての立場を正当化することであったことは確かである。

都市ワリの神殿は、信仰生活や社会生活において重要な役割を果たした。祖先崇拝は根強い習慣であり、神殿は崇拝と尊敬に関わる空間であり、祖先や神々と繋がるための儀礼や祭祀が行われた。

D字形神殿内で発見されたコンテクストに基づくと、各神殿は社会の様々な活動をしていた特定の集団に対応していたと思われる。コンチョパタ遺跡の場合、土器職人が利用した集落と考えられ、D字形建築は土器職人に属していたのだろう。同様に、ニャウィンプキオ遺跡にはほぼ同じ規模の神殿があり、加工済み・加工途中の円形ビーズが大量に出土しており、陸棲・海棲の貝殻を、個人の装飾に用いるビーズに加工する職人の神殿だったのだろう。

首都ワリの場合、7つのD字形建築の発掘から重要

な事実が判明した。この神聖な建築の最終段階として、サイクルの終了と再生を示す要素として火が用いられた。戦士、建築家、石器加工職人といった専門家集団のアイデンティティを示す物や工芸品が置かれた。さらには外部地域の人々や商人のものもあり、例えばカハマルカ由来の土器が発見された神殿などがある。2つの基壇を伴い、高い壁に囲まれたベガチャユフ・モホ地区の神殿は、階層的に最も重要であり、支配者階級のエリートに対応するものと思われる。大きな広場とそれを取り囲む部屋群があり、部屋内に掘られた土坑や円筒墓に様々な奉納品が埋納されていた唯一の例である。他のD字形建築でこのような証拠は見つかっておらず、奉納品の豊富さにおいて他に類を見ない例となっている。

最後になるが、精巧な切り石造りの階段を伴う狭い通路の先にある小規模な神殿は、ある神官や支配者に対応する私的な神殿または信託所のようなものだったのだろう。建築の壁に描かれたネコ科動物と思われる彩色壁画が、大きな手がかりである。

参照文献

（外国語文献）

Benavides, Mario C.

1984 *Cáracter del estado Wari*. Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

1991 Cheqo Wasi, Huari. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. William H. Isbell & Gordon F. McEwan (eds.), pp. 55–69. Washington D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Bragayrac, Enrique

1991 Archaeological Excavations in the Vegachayoq Moqo Sector of Huari. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. William H. Isbell & Gordon F. McEwan (eds.), pp. 71–80. Washington D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Cabrera, Martha R.

2005 Sociedad y estructura urbana en Wari, Ayacucho. In: *Itinerarios del proceso urbano: Ayacucho en la perspectiva de la antropología urbana*. Néstor Godofredo Taipe Campos (ed.), pp. 21–39. Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Cook, Anita G.

2001a Huari D-Shaped Structures, Sacrificial Offerings and Divine Rulership. In *Ritual Sacrifice in Ancient Peru*. Elizabeth P. Benson & Anita G. Cook (eds.), pp. 137–164. Austin: University of Texas Press.

2001b Las deidades Huari y sus orígenes altiplánicos. In *Los dioses del Antiguo Perú. Tomo II*. Krzysztof Makowski (ed.), pp. 39–65. Lima: Banco Crédito del Perú.

2015 The Shape of Things to Come: The Genesis of Wari Wak'as. In *The Archaeology of Wak'as: Explorations of the Sacred in the Pre-Columbian Andes*. Tamara L. Bray (ed.), pp. 295–334. Boulder: University Press of Colorado.

Echevarria, José A.

1981 *Glosario Arqueológico*. Otavalo, Ecuador: Instituto Otavaleño de Antropología.

Fonseca Santa Cruz, Javier & Brian S. Bauer

2020 *The Wari Enclave of Espíritu Pampa*. Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology Press.

Gil García, Francisco M.

2002 Donde los muertos no mueren. Culto a los antepasados y reproducción social en el mundo andino. Una discusión orientada a los manejos del tiempo y el espacio. *Anales del Museo de América* 10: 59–83.

González Carré, Enrique

1992 *Historia prehispánica de Ayacucho*. segunda edición. Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

González Carré, Enrique & Enrique Bragayrac

1986 El templo mayor de Wari. *Boletín de Lima* 47: 9–20.

1996 El área ceremonial en la ciudad de Wari: una hipótesis. In *El Templo Mayor en la ciudad de Wari. Estudios arqueológicos en Vegachayoq Moqo - Ayacucho*. Enrique González Carré, Enrique Bragayrac, Cirilo Vivanco, Vera Tiesler & Máximo López (eds.), pp. 9–27. Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Isbell, William H.

1983 El imperio Huari: ¿Estado o ciudad?. *Revista del Museo Nacional* 43: 227–241.

2001 Huari: crecimiento y desarrollo de la capital imperial. In *Wari: Arte Precolombino Peruano*. Luis Millones (ed.), pp. 99–172. Sevilla: Fundación El Monte.

Isbell, William H. & Anita G. Cook

1987 Ideological Origins of an Andean Conquest State. *Archaeology* 40(4): 26–33.

2002 A New Perspective on Conchopata and the Andean Middle Horizon. In *Andean Archaeology II: Art, Landscape, and Society*. Helaine Silverman & William H. Isbell (eds.), pp. 249–305. New York: Kluwer Academic/ Plenum Publishers.

Kaulicke, Peter

1997 La muerte en el antiguo Perú. Contextos y conceptos funerarios: una introducción. *Boletín de Arqueología PUCP* 1: 7–54.

2001 Vivir con los ancestros en el Antiguo Perú. In: *La memoria de los ancestros*. Luis Millones & Wilfredo Kapsoli (eds.), pp. 25–61. Lima: Universidad de Ricardo Palma.

Leoni, Juan B.

2000 Reinvestigando Ñawinpukyo: Nuevos aportes al estudio de la cultura Huarpa y del Periodo Intermedio Temprano en el valle de Ayacucho. *Boletin de Arqueología PUCP* 4: 631–640.

2005a La veneración de montañas en los Andes Preincaicos: El caso de Ñawinpukyo (Ayacucho, Perú) en el período Intermedio Temprano. *Chungara, Revista de Antropología Chilena* 37(2): 151–164.

2005b Cambio y continuidad en la arquitectura ceremonial ayacuchana de los períodos Intermedio Tempreno y Horizonte Medio. *Revista Andina* 41: 155–176.

Lumbreras, Luis G.

1974 *Las fundaciones de Huamanga: Hacia una prehistoria de Ayacucho*. Lima: Editorial Nueva Educación.

1980 El Imperio Wari. In *Historia del Perú. Tomo II.* Juan Mejía Baca (ed.), pp. 11–91. Lima: Editorial Juan Mejía Baca.

2010 *Plan de Manejo del Complejo Arqueológico Wari, Ayacucho*. Ayacucho: Gobierno Regional de Ayacucho.

Machaca, Gudelia

1997 *Secuencia cultural y nuevas evidencias de formación urbana en Ñawinpuquio*. Tesis de Licenciatura. Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Meddens, Frank & Anita G. Cook

2001 La administración Wari y el culto de los muertos: Yako, los edificios en forma “D” en la sierra sur-central del Perú. In *Wari: Arte Precolombino Peruano*. Luis Millones (ed.), pp. 213–228. Sevilla: Fundación El Monte.

Ñacari, Melissa

2019 *El rol del fuego en el Área Ceremonial de Vegachayoq Moqo - Wari (600 d.c.-1000 d.c.): una aproximación a partir del estudio de restos forestales carbonizados y contenedores portátiles*. Tesis de Maestría, Trujillo: Universidad Nacional de Trujillo.

Ochatoma, José

2007 *Alfareros del Imperio Huari: vida cotidiana y áreas de actividad en Conchopata*. Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Ochatoma, José & Martha Cabrera

2000 Arquitectura y áreas de actividad en Conchopata. *Boletín de Arqueología PUCP* 4: 449–488.

2001 Ideología religiosa y organización militar en la iconografía del área ceremonial de Conchopata. In *Wari: Arte Precolombino Peruano*. Luis Millones (ed.), pp. 173–211. Sevilla: Fundación El Monte.

2002 Religious Ideology and Military Organization in the Iconography of a D-shaped Ceremonial Precinct at Conchopata. In *Andean Archaeology II: Art, Landscape, and Society*. Helaine Silverman & William H. Isbell (eds.), pp. 225–247. New York: Kluwer Academic & Plenum Publishers.

2010 Los espacios de poder y el culto de los ancestros en el Imperio Huari. In *Señores de los Imperios del Sol*. Krzysztof Makowski (ed.), pp. 129–141. Lima: Banco de Crédito del Perú.

Ochatoma, José, Martha Cabrera & Carlos Mancilla

2015 *El Área Sagrada de Wari. Investigaciones arqueológicas en Vegachayuq Moqo.* Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Pozzi-Escot, Denise B.

1991 Conchopata: A community of Potters. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government.* William H. Isbell & Gordon F. McEwan (eds.), pp. 81–92. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Reindel, Markus & Jhony Isla

2017 Nuevo patrón arquitectónico Paracas en Lucanas, sierra sur del Perú. *Boletín de Arqueologia PUCP* 22: 227–254.

Schreiber, Katharina J. & Matthew J. Edwards

2010 Los centros administrativos Huari y las manifestaciones físicas del poder imperial. In *Señores de los Imperios del Sol*. Krzysztof Makowski (ed.), pp. 153–161. Lima: Banco de Crédito del Perú.

Solano, Francisco & Venturo Guerrero

1981 *Estudio arqueológico en el sector de Monqachayoq – Wari*. Tesis de Bachiller, Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Tiesler, Vera

1996 Los entierros del sitio Wari. Estudio de una población prehispánica. In *El Templo Mayor en la ciudad de Wari. Estudios arqueológicos en Vegachayoq Moqo - Ayacucho*. Enrique González Carré, Enrique Bragayrac, Cirilo Vivanco, Vera Tiesler & Máximo López (eds.), pp. 111–135. Ayacucho: Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Williams, Patrick Ryan & Johny Isla

2002 Investigaciones Arqueológicas en Cerro Baúl, un enclave Wari en el valle de Moquegua. *Gaceta Arqueológica Andina* 26: 87–120.

Williams León, Carlos

1981 Arquitectura y urbanismo en el antiguo Perú. In *Historia del Perú. Tomo VIII.* Juan Mejía Baca (ed.), pp. 367–585. Lima: Editorial Juan Mejía Baca.

The “D” Shaped Ceremonial Temples in the Sacred Area of the Archaeological Complex of Wari

José Ochatoma Paravicino*[1], Martha Cabrera Romero*[1]
and José Antonio Ochatoma*[2]

During the last decade, investigations were carried out in the sacred area of the archaeological complex of Wari. As a result of the excavations, five new ceremonial temples with a series of associated evidences have been discovered, suggesting that these temples were not only places of worship for their deities and ancestors, but also places of astronomical activities for the control of time. These ceremonial architectures share a common construction pattern, but differ in dimensions, associated elements, and associated contexts. This fact indicates that there was a certain hierarchy among the temples, and the temples were affiliated to corporate or specialist groups. They realized ritual ceremonies using the fire as a marker of beginnings and closures of different stages of the life cycle.

This article describes the temple’s architectural characteristics, their particularities, and different types of associated contexts. Examples include instruments used in the construction of the buildings, spears made of chonta, deer antlers, and foreign ceramics. These artifacts indicate that the temples probably affiliated to diverse specialist or commercial groups that lived in the city and had their own sanctuaries.

Keywords
temple, ceremonial architecture, sacred area, rituales

*[1] National University of San Cristóbal de Huamanga
*[2] Pontifical Catholic University of Peru